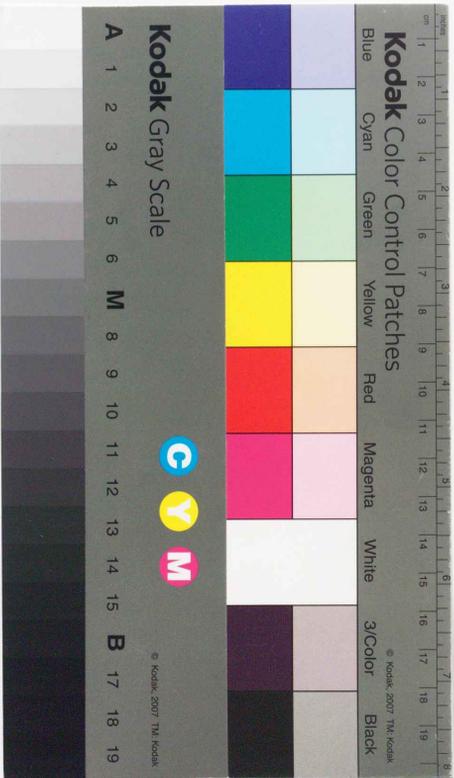


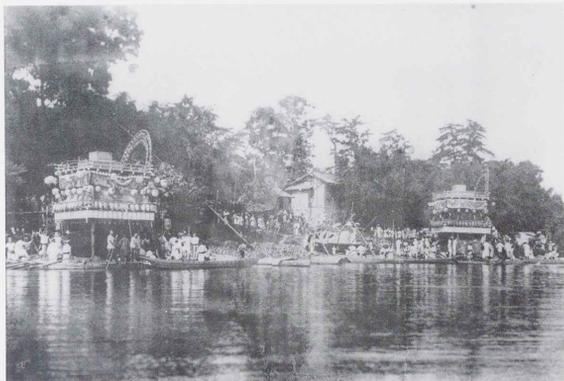
ふる里の
川まつり



羽島郡川島町 川まつり保存会



題 字 川島町長 野田 知 澄
表紙写真 川まつりのやま 東 組
裏面写真 " 西 組
昭和28年頃



(大正3年)



(昭和36年)



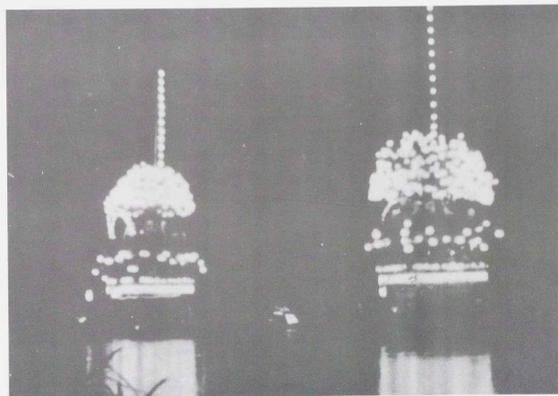
(昭和36年)



(昭和22年)



(昭和23年)



(昭和34年)



(昭和36年)

発刊のことは

木曾川に囲まれた川島は、川の恵みを受けるとともに数多くの洪水によって苦しめられた所でもあり、川島の歴史は正に木曾川の洪水の歴史でもありました。

川に囲まれたこの地域には水難から守る願いをこめた水神様のまつりが古くからあちこちにあったようです。なかでも当渡、北山地区では昭和38年迄つづいておりましたが時代の進展とともに中止のやむなきに至りました。

その後「やま」や道具、記録文書等を整理保存して、昭和60年12月に町有形民俗文化財(第1号)に指定され、61年7月に川まつり保存会を結成し、62年7月に「川まつり資料館」が完成し館の中に「やま」を組み立てて川まつりの様子などを納めた当時の写真やビデオ・カセットテープ等を展示し、何時でも川まつりの様子を見聞することができる様保存することが出来ました。また、会員の皆さんの協力によりおはよしの採譜も作成をいたしました。

この冊子は川まつりの現在に至るまでの経過とともに川まつりに関心を持たれる方々に広く利用されお役に立てば幸いです。

また、資料の収集・調査等にお骨折り下さいました方々に厚くお礼申し上げます。

平成 4年 7月30日

歴代の保存会長

昭和61年	川瀬 銀一
62年	川瀬 宣
63年	川瀬 演
平成元年	野田 五作
2年	澤田 正夫
3年	野田 礼一
4年	川瀬 修一

発刊によせて

川まつり資料館館長

野田 薫

木曽川の清流とともに、水のめぐみに感謝し、また治水や水難から守る祈りを込め乍ら、古くからのゆみなく続いてまいりました「川まつり」も河川改修のため、昭和38年を最後に川にうかんだあの美しい姿も見られなくなりました。

私達が先人が残してくれた「川まつり」のやまを郷土遺産として後世に保存するため、昭和55年、地元住民によるアンケート調査が実施されました。その集約は何らかの形で残そうとの結果となり、爾来10有余年の歳月がたちました。この間多くの方々に様々なご協力とご支援を得て、昭和62年に、「川まつり資料館」が完成し、東西の「やま」も昔の原形の姿で保存され、これに附随して数多くの資料も展示する事が出来ました。

また、昭和63年には、ぎふ中部未来博に於て川島町の郷土芸能として「おはやしの道行き」を演じ大成功に終わりました。親から子、子から孫へと口づたへで受けつがれてまいりました笛、太鼓の「おはやし」も保存会員の努力によって、平成3年10月に採譜が出来上り、これらの資料を取りまとめ「ふる里の川まつり」と題し一冊の冊子が発刊される運びとなりました。

この川まつりをこよなく愛し続けられてきた多くの先人達の心を受けつぎ、これを文化遺産として末永く後世に伝えて行く事は大変意義のあることだと思います、現在この地に住んでいる私達の務めだとも思います。この冊子が地元の人々を始め今は町外にお住まいのかつての地域関係者皆様にきつとお役にたつ事を信じ、何時の日かこの「川まつり」がこの地に希望と繁栄をもたらしてくれる事と思います。

発刊を祝して

川島町長 野田 知 澄

この度は、「ふる里の川まつり」の発刊誠に意義深く、心からお喜びを申し上げます。

川島町は、木曽川の清流と緑豊かな自然に抱かれて、育まれ、そして繁栄を遂げてまいりました。しかしその陰には遠い昔から先人たちの繰り返し、繰り返して洪水と戦った苦勞の歴史が深く刻まれていることを忘れることはできません。

この「川まつり」は、木曽川の中洲に住みついた先人達が木曽川から受ける恩恵や、治水の苦しみなど、喜びや悲しみを豊かな大自然の風土に託した血と汗のたゆみない暮らしの中で、共通の願いや祈りを込めて又唯一の歓楽として、みんなで力を合せてこのまつりが営まれ、長い間引き継がれてきたものと思います。こうした貴重な文化遺産を後世に伝えることは誠に素晴らしいことと存じます。

昭和62年には有志各位のご尽力によって「川まつり資料館」が建設され、東・西二組の「やま」が昔のままの姿で、関係の資料とともに展示され保存されることになりました。又こうしたことを機に翌年に行なわれたぎふ中部未来博覧会には、川島町の郷土芸能として、笛・太鼓の「おはやし」がお祭り広場せまじと賑やかに演じられ広く県民に紹介されて喝采を拍したことは忘れることができません。その後関係者の間では折にふれ、いま一度水面に浮かび笛・太鼓の「はやし」に調和して華麗に舞ふ雌雄の「やま」の姿を再現させてほしいと云う声しきりと聞いております。

こうしたときに本書が、「川まつり」の由縁について関心をもたれる方々や、実際にたずさわった人達が当時に思い、先人の労苦の跡に思いを馳せて、謝恩の念を呼び起こし、後の世に伝えられることを祈念してやみません。

寄 せ 太 鼓

羽島郡四町教育委員会

教 育 長 西 脇 成 紀

昭和62年7月30日の朝のことです。

神明神社から、カランカランといかにも気持ちのいい音が渡（わたり）北山の町じゅうに、ひびきわたりました。

川まつり保存会の皆さんが、長い間夢みてこられた「川まつり資料館」の完成式が始まる寄せ太鼓の音でした。

私は今でもあの時の保存会の皆さんの満足そうな顔、紅潮した頬を忘れることができません。

すばらしい船が、すばらしい資料がよくぞこんなに立派に残されていたものだと、渡北山町の皆さんの厚い信仰心と、川まつりに寄せてみえた情熱に心から敬服しました。

その時に二つのことが話しあわれました。

ひとつは、これを機会に、できるだけ資料を集めて、本に残しておきたいこと。

もうひとつは、いつか近い将来、ぜひ川まつりを再現したいということでした。

今、ご覧いただくように、資料集が集大成されました。生涯学習時代を迎えて、ふるさとを見直そう、ふるさとを伝えよう、そして新しいふるさとづくりをしようという時に、すばらしいものを作っていただけました。

もうあとは、悠々たる川島の木曾川に、あの船が浮び、笛や太鼓に、ふるさとの人々が集まって、胸を熱くする日を待つだけです。

渡北山の宝としてだけでなく、川島町全体の宝として、日本の宝として、本番川まつりの寄せ太鼓の音色がひびく日が来ることを祈っています。

目 次

発刊のことば	川まつり保存会会長
発刊によせて	川まつり資料館館長
発刊を祝して	川島町長 野田 知澄
寄せ太鼓	教 育 長 西 脇 成 紀

1. 木曾川と川島	6
2. 川まつり	7
3. 川まつり保存会	13
4. 「川まつり」一口メモ	25
5. 文化財の指定	29
6. 川まつり資料館の建設	31
7. 川まつりおはやし復元奉納	44
8. 川まつりのおはやし	57
9. まとめ	82
10. 資料	83
編集後記	100

1. 木曾川と川島



川まつりが行なわれていた昭和7年の木曾川

木曾川に囲まれた川島は、川の恵みを受けるとともに、洪水によって苦しめられたところでもある。

川島の歴史は、正に木曾川の洪水の歴史であるといっても過言ではない。

木曾川は、全国にも知れわたった大河である。かつて、この川の呼び名は時代により場所によっていろいろ言われてきた。今まで史書に見られる名だけでも、

鶴沼川、広野川、墨俣川、美濃川など知られている。

このことは、木曾川が犬山鶴沼あたりから下流は流路の変動が激しく、洪水の一夜が明けると流れが変わるというような不安定な川であったからである。天正以前の木曾川は、下流が犬山と草井の間で木曾七流とか八流と称する数多くの派川に分流し、本流は、今の境川筋を流れていた。このようにいくつかの分流水のため、川幅も水量も今ほど安定した豊かさはなかった。

この川が、木曾川と呼ばれるようになるのは、天正14年の洪水で、ほぼ現在の流路となり、掛斐、長良から独立して濃尾平野を流れ、その後、豊田秀吉によって河道全体に大規模な築堤が築かれてからである。そして、慶長13年、徳川幕府の治水工事でいくつかの分流がふさがれ本流一本になって見事に整えられた大河となったのである。

川の中島である川島は、享保12年(1727)の「木曾川通絵図」をみると、十数の島になっていたことがわかる。そして洪水のたびに島の形とその数を変えており、いかに不安定な土地であったことがわかる。毎年のように洪水に見舞われる川島は、人々が住むのに大変困難で、大水が出るたびに家の中から水が入ってきた。そのため古い屋敷には、高く石積みをしてその上に家が建てられている。また、それぞれの島は周囲に、小さな堤を築いているが、これらは洪水との戦いの中で築かれたきたものであった。この堤は、今でも松倉、小網、河田、笠田、渡に残されている。

土質は、砂地であるため穀物を作ることは不適で、人々は船子、船業を営み、船を使って物を売買していた。また上流から流されてくる薪などを拾い集めて売っていた。水田には不向きで水はけのよい土地は、桑を育てるには適していた。蚕を飼い糸を紡ぎ、織物を織っていた。現在の川島の主要産業である操業、織物はすでに古い歴史をもっている。

川に囲まれたこれらの地域には水神様が祀られ、水難から守る川祭りが行われていたわけである。

2. 川まつり

川島における水神様の川祭りは、それぞれの集落で行われていたが、渡、北山の川祭りは「やま」が、東西2艘出され、はやしを打ち、昼から夜にかけて盛大に行われていた。「やま」が出る川祭りは、川島町の近くでは無動寺、松倉、三ツ屋、宮田、犬山などで行われていたが、渡・北山は最近まで続けられていた。

(1) 川まつりの起こり

川祭りは、水神様の祭りとして行われているが、「やま」を出し、夜は、中央に半円、山型の365個の提灯を飾りつけ、さらに中央高く心柱を立ててここに12個(閏年は13個)の提灯をかかげている。この点、津島祭りの宵祭りと同様であり、渡の川祭りは、木曾川を伝い津島から伝承されたものと考えられる。

津島祭りは天王祭りとも言われているが、渡の神明神社には天王様も祀られている。この祭りがいつからはじめられたかは、はっきりしないが、享保年代の木曾川の大洪水からはじまったと伝えられている。

(2) 川まつりの行事

(1) 神社の清掃・幟立て

毎年7月27日には、神明神社(八幡神社、天王様合祀)及び神社境内の清掃を行い幟を立てる。

(2) やまを組む

7月28日には、若衆たちが、船五艘を横に連結してその上に屋台を組む。やまの材料は、それぞれの家に保管されている。それを若衆たちが役割りを決め運び出して川の中ではこりを洗い落とし組み上げていく。



東西のやま



道行き

(3) 新楽・やまを飾る

7月29日は、新楽といこの日は本番にそなえて一度やまに幕、提灯をつけてみる。幕は、水引き、中幕、下幕の3種類が飾られる。提灯は、赤丸、白丸、馬上、弓張りの五種類、また掛行灯がつけられる。一度つけられた提灯、幕は夕方までには外される。

(4) 本祭り

7月30日の本祭りは、午前中にやまの飾りつけを完成させる。午後1時頃、祭りの当元から、お神酒を持つ当家を先頭に、6～8人の年行司、6～8人の大太鼓、8人ほどの小太鼓、20人ほどの笛の行列がはやしを行いながら出発し神明神社に向う。ここで、神明様、八幡様、天王様にご祈禱しお神酒を奉納する。この後、やまに乗りこみ、かんからの合図でやまが動き出す。

西組の方は、若衆が、中棚へ上ってはやしを行い、中老たちは船をこぐ、東組の方は、ほとんど若衆によってはやしも船こぎも行われる。一つのやまに総勢50名ほどが乗りこんでいる。

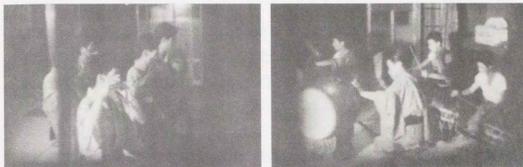
やまには、東組、西組それぞれが競争のように乗りこみ、東西二つのやまは大きく回転しながら川を500メートルほど下り、また上って昼の祭りを終わる。

この後、若衆や中老によって夜のやまの飾りつけを行う。提灯の飾りつけは、とくに半円形の36個の提灯、その中央の心柱に12個（四年は13個）の提灯がかかけられ、いっそう華やかさを増す。かんからの合図とともに二つのやまがゆっくり回転しながら川を下り、また上ってきて夜の祭りを終わる。船が動いている間じゅう、笛や太鼓のはやしが行われ、夜の川面に美しい提灯の火が輝いていっそう祭りを盛り立てる。

(5) やまおろしと送り込み（後祭り）

7月31日は、やまおろしといってやまのかたづけを朝早くからおこなう。また、夕方には、送り込みといって祭りに使った道具を荷造りし来年の当元の家に持っていく。荷物は、中老を中心にもっていくが、祭りを盛り上げるということで若衆は仮装して、祭礼役員、祭主（当元）、若衆と行列をつくり、はやしを吹き鳴らしながら行った。くじに当たった当元では、昼間若衆が行灯にまん画などの絵をかき灯を入れて入口に並べて迎えた。この日、酒と折り箱で関係者をもてなすならわしであった。そして、ここで練習から祭りまでの総ざらえを行った。

(3) はやしの練習



当元での練習

川祭りには、笛、太鼓によるはやしが行われるが、このはやしの練習はまつりの半月ほど前から当元の家で毎日行われる。

(1) 練習始め（7月15日）（昭和20年前は7月1日）

笛・太鼓の練習は昼頃より行われていたが、仕事の関係で次第に夕方になっていった。毎晩、当元の家に集まり行われる。

集合は、寄せ太鼓といって柱に太鼓を結びつけ、この太鼓をたたいて始まりを知らせるものである。3回の合図までに集まることになっていた。練習時は、先輩の人、目上の人の言うことをよく聞かなくてはならなかった。練習場には、女性は入室を禁じられていた。練習始めの日は、練習が終わると当元では、祝酒でもてなした。

(2) 二本調べ（7月18日）

練習が進み、この日は、笛・太鼓の審査が行われる。二本調べということは、皆の前で2人ずつ笛を吹き、太鼓を打って審査を受けることである。審査は、西組の方は、一等級といわれる24才、25才の人により行われ東組の方は長方といわれる20才から22才の人により行われる。

(3) 一本調べ（7月20日）

二本調べで合格したものは、この日さらに皆の前で一人ずつ笛を吹き、太鼓を打って審査を受ける。この一本調べに合格すると紋付の羽織はかまを着て祭りに参加することができる。合格できなかったものはやまへは上れず諸道具の持ち運びや太鼓持ちなど使いにまわされた。

(4) まつりの道具

祭りの道具は、大太鼓、小太鼓、笛、提灯、供物道具などいろいろある。

(1) 大太鼓（がく）

大太鼓は、東西組とも3、4個使用する。太鼓をさげた竹棒を2人の男で向かい合ってかつぎ、太鼓の両面を木ばちで打ち合う。

(2) 小太鼓 (つけ)

小太鼓は、東西組とも3、4個使用する。1人が「つけ」に付けてあるひもを首にかけ両手で支え持ち後ろ向きになって歩く。もう一人がその人の帯を持って誘導する。そして、合格した人がそのつけを打つ。曲によって竹ばえ(竹ばち)を使用した。

(3) 笛

笛は、長さ43センチメートルほどの竹笛で合格した者全員が吹いた。吹く時、音色をよくするために水でしめらせて吹いた。水は、水おけに入れて運んだ。

(4) かんから (寄せ太鼓)

小太鼓、かんから1個ずつを柱にくくりつけ竹ばえで2人で打った。これは、合図のときに使われたもので練習をはじめるとき、はやしの始め終わり、やまが出発するときなどに打たれた。

(5) 衣裳

笛・太鼓に合格したものは、紋付の羽織はかまを付け、白色の袴のわらぞうりをはいた。

道具の購入・修理

太鼓は、津島から購入し、太鼓の皮が悪くなるとすぐりかえてよい音が出るようにした。笛は清州から、提灯、ろうそくは岐阜市から購入した。ろうそくは、長さ15センチメートルのものを400本以上必要とした。

(5) まつりのやま

◎やまのつくり方

(1) 土台づくり (93頁参照)

船(3枚腹)を5艘横に並べて、船の前後の張り木の上に丸太2本を置いてしばりつけ5艘の船を一体にする。船敷には、船を安定させるために20センチメートル大の石を並べて置く。さらに、丸太の上に厚さ、6センチメートル、幅30センチメートル、長さ3.6メートルのあゆび板(歩む板の意)を置く。その上に、厚さ16センチメートル、幅23センチメートル、長さ6.3メートルの台骨をのせる。台骨の上に厚さ16センチメートル、幅20センチメートル、長さ4.2メートルの四角に組んだやまの土台を置く。

(2) やまつくり (92頁参照)

やまは、釘を1本も使わないで組立てるようになっている。土台の上に4本柱を立て、やまの大棒をつくる。中棚のところにねたを5本ずつ組み合わせて置き、また、角ねたを4本取り付けこの上に板を並べて中棚をつくる。中棚のまわりは高欄を取り付ける。

上壇は、中棚の上にはりを四方につけ、ます型をつけ、この上にねたを取り付け板を並べてつくる。さらにまわりに高欄をつくる。

上壇のところは、大重といって角材で骨組をつくり板をまわりに張った高さ45センチメートルほどの箱をふせたように置き、さらに小重といって大重よりやや小さく、上に丸く穴をあけた箱をふせたように置く。小重の穴のところは、麦わらを入れた鳥かごを大重の上面までふせるように入れる。心柱は上壇の床の大重のすぐ横に柱の入る穴をあけ、中棚の床までさしこむ。心柱の長さは10メートルほどもある。

(3) 幕張り

幕は、下幕と中幕、みずひきがある。中幕及び下幕は四方にそれぞれ幕をはり、上壇の高欄には一枚つづきのみずひきを四方にとりまくように張る。

(4) 提灯つけ

・昼の提灯

中棚、高欄に各自が祭りに持っている弓張り提灯(祭礼役員用)と控提灯(若衆用)をかける提灯の表側には「東組祭礼係」とか「西組祭礼役員」など記し、裏側には自分の名前を記している。この提灯はやまに乗るときにかけられる。中棚、高欄のすぐ下に行灯をつける。行灯は、長さ1.8メートル、幅23センチメートル、高さ40センチメートルのものを一方に2個、全部で8個つける。一つ行灯には5本のろうそくがつけられる。

次に馬上提灯を中棚の上に、大12個小20個つける。大は直径40センチメートル小は直径30センチメートルのもので、これには東組の方は「東組わかれん」、西組の方は「西組わかれん」と書かれている。

さらに、上壇、前方に月の輪の提灯をつける。月の輪というのは、竹で半月形に二重の輪をつくることから呼んでいるが、この半月形の竹軸に赤丸提灯を40個ほどつける。この月の輪の提灯の後に神酒を供え当家が座る。また、船から中棚にかけては、はしがかけられるが、その両脇に高張り提灯がとりつけられる。この提灯には、「西組」とか「東組」とか書かれている。

・夜の提灯

昼にとりつけられた提灯には、それぞれろうそくの火がともされていくが、夜には、さらに、上壇にある鳥かごに白丸提灯をつけた長さ2メートルほどのひご竹が1年の日数を示す365個付けられる。これは、船の近くの岸にひご竹を置くところを設けて、ここにひご竹を立てて並べ、これに提灯を1個ずつとりつけていく。西組の方は、提灯の底に、2〜3個の小石を入れて安定させ、ろうそく立てのくぎには、なすの輪切りをさきこみの上のろうそくを立てる。なすの輪切りは火が提灯に燃え移らないためである。東組の方は、なすの輪切りの代わりに泥団子を作って入れる。

岸で提灯に火をつけると中棚にいる人に渡し、さらに上壇の人に渡して鳥かごにひご竹を丸形にさし込んでいく。

また心柱には、半年は12個の提灯がとりつけられるが、これは、2本のつなごの間に竹をとりつけ12の枠をつくつた中に一個ずつ提灯をとりつけ、上の方の提灯からろうそくに火をつけるとつなを少しずつ引れば12個の提灯をまっすぐに並べていく。

(6) はやし

はやしは、笛と太鼓で行われるが、道行きは「オカジャラキ」「しんぐるま」「新道行き」「本道行き」「しゃぎり」また、やまの「上り」「下り」がある。西組、東組で拍子や曲にややちがみられる。

(7) まつりの経費

祭りの経費は、祭りが終わったところで東組の方は出頭の人により、西組は一等組の人によってそれぞれの家の財産高に応じて割り出され集められた。

(8) 当元

当元は、毎年夜のやまが終わった後、今までに当元をやつたことのない家の中からくじで決められる。くじは、若衆の代表が一人木曾川で身体を清め、裸で若衆や祭礼役員、観衆の見守る中で行われる。

くじに当たった当元は、直ちに若衆二人が使い走り、くじに当たったことを伝え、承諾の有無の返事を聞いてくる。当たった家は、翌日送り込み(宿替え)があるから大変である。その夜のうちに家の中を整理し翌日に備える。

当元は、祭りの祭主となり、はやしの練習の宿から、祭りが終わって次の当元へ送り込みを終るまで祭り一切の宿元(当元)となる。

3. 川まつり保存会

昭和39年から「やま」の出る川まつりが行われなくなってきたが、昭和49年の川島町盆おどり大会のときに町民グラウンドで、地元の人たちによって川まつりのはやしが披露された。10年ぶりにはやしを聞き、町民から大変なつかしく思われました。

その後、地元から民家に預けられている「やま」の道具を何とかしてほしいという声が上がリ、昭和58年の川島町ふるさと史料館の建設のときには、そこへ寄付するとか地元で倉庫を作って納めたらどうかという話が出された。

この間、地元の文化財保護審議会委員さんは「やま」の文化財的価値とその保存について町文化財保護審議会に幾度もなく訴えられた。

昭和60年12月29日川まつりの「やま」が町の文化財(有形民俗文化財)に指定され、いっそう地元の人たちは、川まつりの保存に力を入れ、昭和61年7月30日に川まつり保存会を結成されました。保存会の人たちは、さらに、川まつりの「やま」や道具・資料を保存する「川まつりのやかた」建設のため、地元や町当局に働きかけ、木曾川治水工事開始百周年にあたる昭和62年7月に「川まつり資料館」が完成しました。

こうしたことが反映して、地元の人達からおはやし(道行き)の復元の気運が高まり有志の皆さんの熱意とご努力によって20数年振りの昭和63年7月31日に復活、渡町の神明神社に於いて復元奉納されました。また、このおはやしは、同年に岐阜市で行われた「ぎふ中部未来博」に川島町郷土芸能の一つとして出演披露されました。

昭和63年7月31日(日) 渡町神明神社にて復元奉納された「おはやし」の様子



伝統の灯いま一度

川祭り再興の動き

渡町地区
まずおはよしの復活へ



子供たちが伝承

「おはやし」の復活を期す川まつり保存会の活動

川まつり保存会は、昭和61年7月30日に結成された。保存会は、川まつりの「やま」や道具・資料を保存する「川まつりのやかた」建設のため、地元や町当局に働きかけ、木曾川治水工事開始百周年にあたる昭和62年7月に「川まつり資料館」が完成しました。このように、川まつり保存会は、川まつりの「やま」や道具・資料の保存と、川まつりの復活を期す活動を行っています。

川まつり保存会は、昭和63年7月31日に渡町神明神社にて復元奉納された「おはやし」の様子を撮影しました。この「おはやし」は、川まつりの重要な要素の一つであり、川まつりの復活を期す活動の中心となっています。

川まつり保存会は、今後も川まつりの復活を期す活動に取り組んでいきます。

(資料1)

町 民 各 位

昭和55年9月1日

渡町総代 川 瀬 涉
北山町総代 青 井 勝 次

「川祭り」保存のアンケートについて

今年も、冷夏のまま秋に入ってしまった。農作物の収穫時期を前にして、冷害が心配されていますが、やはり夏は暑く、活動的な方が良いように思います。

夏といえば渡町も何かさびしさが感じられませんか。夕闇迫る頃から涼を呼ぶような笛、太鼓の音色。真夏の夜の風物詩として近郷、近在の人々から親しまれ、あの川面に浮び、365個の提灯をつけた二そうの山船が木曾川に映える豪華けんらんな祭礼が姿を消してから久しく、川辺をにぎわした「川祭り」の思い出が私達の脳裏をかすめます。

さて、いろいろな思い出も多い川祭りですが、川島町文化財保護審議会から、「歴史的に見ても貴重な川祭りをそのまま放っておけば子孫に伝えることなく、永久に跡絶えてしまうことも考えられ、何とか保存の手だてはないものでしょうか」とお話がありました。

先日、祭礼役員である年行事さんから渡町の方へ「川祭り」の保存・管理を移管する旨の話がありました。そこでこのたび保存の方法について他の地域で伝承しているような保存会を組織して、子孫に永く伝えていく方法をとったという意見がありますので、これについてのお考えを知りたく存じますので、次のアンケートに率直なご意見をくださいますようお願いいたします。

<アンケート>

◎川祭りの保存についてどう思いますか。

(該当番号に○をつけて下さい)

- 1 川祭り保存会を組織して保存する方がよい。
- 2 保存しても なくてもよい。
- 3 保存する必要がない。
- 4 その他 ()

(資料2)

川まつり保存会会員殿

酷暑の候、貴殿には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

日頃は、川まつりの保存の件につきまして、格別のご協力をいただき厚くお礼申し上げます。さて、標記の件につきまして、去る7月30日に渡公民館で会をもちましたところご多忙にもかかわらず多数ご参加いただき熱心にご審査いただきました。おかげをもちまして、別紙「川まつり保存会」の会則と役員を決めることができました。これもひとえに貴殿のご支援・ご協力の賜ものと厚く感謝申し上げる次第です。今後はこの川まつりを保存することが、渡・北山町住民の総意であるという立場に立って町当局はじめ関係各位に具体的な働きかけをしていきたいと思いますので、一層のご協力をお願い申し上げます。

なお、当日決定致しました川まつり保存会会則と保存会役員名簿を送付させていただきます。

昭和61年8月5日

川まつり保存会会長
川 瀬 銀 一

川まつり保存会会則

第1条 名称

この会は、川まつり保存会という。

第2条 事務所

この会の事務所は、保存会会長宅に置く。

第3条 目的

この会は、渡・北山町に古くから受け継がれている民俗芸能の川まつりのやまと祭りばやしを保存し、存続していくことを目的とする。

第4条 事業

この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 川まつりのやまの保存
- 2 祭りばやしの伝承と諸道具の保護と保全
- 3 その他川まつりを保存するのに必要な事項

第5条 組織

- 1 この会は、第六条の役員並びに渡・北山町の住民、及び特別会員をもって組織する。
- 2 特別会員は、第三条に賛同する者をいう。

第6条 役員及び会員

この会に次の役員（渡・北山町に在住する）を置く。

顧問 町議会議員

会長 渡町内会長

副会長 文化財保護審議委員 北山町内会長
渡町内会副会長 東・西組宮総代
東・西組年行事長

幹事 渡町内会各組長 北山町内会副会長
子ども会会長 渡町各老人クラブ会長
消防分団長

庶務会計 会長が選任する者とする。

第7条 運営委員会

会長・副会長・幹事をもって運営委員会を構成する。

第8条 役員の仕事

会長は、この会を代表し、会務を統括し、会議の議長となる。副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は、これを代理する。庶務会計は、庶務会計を掌理する。

第9条 会議

- 1 運営委員会は会長が召集し、会則の改正、予算、決算の審議その他川まつり保存に関わる必要な事項の審議と運営に当たる。
- 2 総会は、原則として、年の初めに開催し、その他必要がある時は運営委員会の同意を得て開催できる。
- 3 議事は、出席者の過半数をもって可決し、可否同数の時は、議長の決するところとする。

第10条 経費

本会の経費は、会費、補助金、寄付金その他の収入をもって充てる。

第11条 会計決算

この会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わるものとする。

第12条 雑則

この会則に定めていない事項については、運営委員会で定めるものとする。

付則 この会則は昭和61年7月30日から実施する。

川まつり資料館の管理・運営

川まつり資料館を管理・運営するために、次の役員を置く。

顧問 渡町・北山町内会長

館長 文化財保護審議委員

副館長 東・西組宮総代

役員 東・西組年行事長

会員 若干名（館長が委嘱）

この管理・運営は、昭和62年8月1日から実施する。

昭和61年 川まつり保存会役員名簿

7月30日現在

役 職	氏 名	電話番号	役 職 名	備 考
会 長	川 瀬 銀 一	3 1 4 6	渡 町 総 代	
副会長	青 井 政 昭	4 2 0 7	北 山 町 総 代	
副会長	野 田 薫	2 1 0 8	文化財審議委員	
副会長	野 田 武 男	2 6 6 2	総 代 代 理	
副会長	川 瀬 季 正	3 6 2 8	東組 年行事長	
副会長	野 田 茂 夫	3 4 2 5	西組 年行事長	
副会長	川 瀬 清 兵 衛	2 5 8 0	宮 総 代	
副会長	野 田 武 男	2 6 6 2	宮 総 代	
幹 事	青 井 敏 之	2 4 8 8	総 代 代 理	
幹 事	川 瀬 忠 義	2 3 1 9	渡クラブ会長	
幹 事	川 瀬 渉	3 6 2 2	渡中クラブ会長	
幹 事	野 田 三 男	2 2 8 4	渡嘉クラブ会長	
幹 事	野 田 五 男	2 6 6 7	渡1班 班 長	
幹 事	川 瀬 武 留	2 0 0 6	渡2班 班 長	
幹 事	野 田 芳 夫	3 4 7 6	渡3班 班 長	
幹 事	野 田 昌 弘	3 2 2 1	渡4班 班 長	
幹 事	川 瀬 敏 巳	2 5 1 6	消 防 団 長	
幹 事	青 井 き ぬ え	2 5 1 1	婦 人 会 長	
幹 事	川 瀬 利 雄	2 1 4 1	子 供 会 会 長	

昭和62年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職 名	氏 名	電話番号	役 職 名	川まつり資料館
会 長	川 瀬 宣	3 6 6 3	渡 町 総 代	野 田 薫
副会長	青 井 俊 彦	3 9 3 2	北 山 町 総 代	
副会長	野 田 薫	2 1 0 8	文化財保護審議員	
副会長	川 瀬 銀 一	3 1 4 6	渡町総代代理	
副会長	川 瀬 信 一	2 1 5 6	東組年行事長	
副会長	野 田 森 一	2 6 0 2	西組年行事長	
幹 事	野 田 貞 夫	3 2 7 2	渡1班 班 長	川 瀬 信 一
幹 事	川 瀬 福 男	2 5 6 3	渡2班 班 長	野 田 森 一
幹 事	川 瀬 宗 夫	3 3 7 3	渡3班 班 長	
幹 事	野 田 功 夫	2 7 2 3	渡4班 班 長	
幹 事	川 瀬 克 治	2 7 0 9	北山町総代理	
幹 事	川 瀬 良 一	2 6 2 3	渡クラブ会長	
幹 事	川 瀬 渉	3 6 2 2	渡中クラブ会長	
幹 事	野 田 三 男	2 2 8 4	渡嘉クラブ会長	
幹 事	川 瀬 晴 義	3 6 6 4	消 防 団 長	
幹 事	青 井 和 子	4 2 0 7	婦 人 会 長	
幹 事	川 瀬 章 憲	3 6 2 9	子 供 会 会 長	

昭和63年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職名	氏名	電話番号	役職名	川まつり資料館
会長	川瀬 演	3624	渡町総代	野田 薫
副会長	青井俊男	3194	北山町総代	
副会長	野田 薫	2108	文化財保護審議員	
副会長	川瀬 宣	3663	渡町総代理	
副会長	川瀬 渉	3622	東組年行事長	
副会長	野田五作	3540	西組年行事長	
幹事	野田正典	2784	北山町総代理	川瀬 渉
幹事	野田守男	2760	渡1班班長	野田五作
幹事	高橋 勉	2432	渡2班班長	
幹事	川瀬 稔	3990	渡3班班長	
幹事	野田鉄治	3615	渡4班班長	
幹事	川瀬良一	2623	渡クラブ会長	
幹事	川瀬 渉	3622	渡中クラブ会長	
幹事	野田三男	2284	渡嘉クラブ会長	
幹事	野田寿男	2570	消防団長	
幹事	青井和子	4207	婦人会長	
幹事	川瀬幸英	3621	子供会会長	

平成元年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職名	氏名	電話番号	役職名	川まつり資料館
顧問	川瀬 巧	2163	町議会議員	野田五作
顧問	川瀬勝秀	2027	町議会議員	青井法夫
顧問	野田文吉	3540	町議会議員	
会長	野田五作	2590	渡町総代	野田 薫
副会長	青井法夫	2660	北山町総代	
副会長	野田 薫	2108	文化財保護審議員	
副会長	川瀬 演	3624	渡町総代理	
副会長	川瀬正夫	3655	東組年行事長	
副会長	野田新一	3353	西組年行事長	
幹事	青井義行	2018	北山町総代理	川瀬正夫
幹事	川瀬恵央	3673	渡1班班長	野田新一
幹事	川瀬 貢	2436	渡2班班長	
幹事	野田一宏	2665	渡3班班長	
幹事	野田年幸	3426	渡4班班長	
幹事	川瀬金彦	3719	渡クラブ会長	
幹事	川瀬 渉	3622	渡中クラブ会長	
幹事	野田武男	2662	渡嘉クラブ会長	
幹事	青井 朗	3996	消防団長	
幹事	野田峯子	4391	婦人会長	
幹事	野田好春	3422	子供会会長	

平成2年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職名	氏名	電話番号	役職名	川まつり資料館
顧問	川瀬 巧	2163	町議会議員	澤田 正夫
顧問	野田 文吉	3540	町議会議員	青井 哲
顧問	川瀬 勝秀	2027	町議会議員	
顧問	野田 薫	2108	町議会議員	
会長	澤田 正夫	3668	渡町総代	野田 薫
副会長	青井 哲	3943	北山町総代	川瀬 演
副会長	野田 薫	2108	文化財保護審議員	野田 礼一
副会長	川瀬 演	3624	宮 総代	
副会長	野田 礼一	2261	宮 総代	
副会長	野田 五作	2590	総代代理	
副会長	川瀬 光義	2803	東組年行事長	
副会長	野田 照二	3659	西組年行事長	
幹事	野田 幸雄	3715	北山町総代理	川瀬 光義
幹事	鈴木 一彦	2162	渡1班班長	野田 照二
幹事	川瀬 智民	2592	渡2班班長	
幹事	川瀬 剛	2587	渡3班班長	
幹事	野田 文字	3854	渡4班班長	
幹事	川瀬 金彦	3719	渡クラブ会長	
幹事	川瀬 涉	3622	渡中クラブ会長	
幹事	野田 武男	2662	渡嘉クラブ会長	
幹事	野田 千人	2108	消防団長	
幹事	川瀬 美紀枝	3063	婦人会長	
幹事	青井 義行	2018	子供会会長	

平成3年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職名	氏名	電話番号	役職名	川まつり資料館
顧問	川瀬 巧	2163	町議会議員	野田 礼一
顧問	野田 文吉	3540	町議会議員	青井 敏之
顧問	川瀬 勝秀	2027	町議会議員	
顧問	野田 薫	2108	町議会議員	
会長	野田 礼一	2261	渡町総代	野田 薫
副会長	青井 敏之	2488	北山町総代	川瀬 演
副会長	野田 薫	2108	文化財保護審議員	野田 貞明
副会長	川瀬 演	3624	宮 総代	
副会長	野田 貞明	2087	宮 総代	
副会長	澤田 正夫	3668	渡町総代理	
副会長	川瀬 秀雄	2656	東組年行事長	
副会長	野田 功夫	3473	西組年行事長	
幹事	青井 朗	3715	北山町総代理	川瀬 秀雄
幹事	野田 功	2528	渡1班班長	野田 功夫
幹事	川瀬 春治	3711	渡2班班長	
幹事	川瀬 清昭	2382	渡3班班長	
幹事	野田 富美男	3667	渡4班班長	
幹事	川瀬 宣	3663	渡クラブ会長	
幹事	川瀬 涉	3622	渡中クラブ会長	
幹事	野田 武男	2662	渡嘉クラブ会長	
幹事	川瀬 慶治	2208	消防団長	
幹事	野田 耕平	3217	子供会会長	

平成4年 川まつり保存会役員名簿

1月15日現在

職名	氏名	電話番号	役職名	川まつり資料館
顧問	川瀬 巧	2163	町議会議員	川瀬 修一
顧問	野田 文吉	3540	町議会議員	青井 俊男
顧問	川瀬 勝秀	2027	町議会議員	
顧問	野田 薫	2108	町議会議員	
会長	川瀬 修一	2143	渡町内会長	野田 薫
副会長	野田 薫	2108	文化財保護審議	川瀬 建
副会長	青井 俊男	3194	北山町内会長	野田 貞明
副会長	野田 礼一	2261	渡町内会副会長	
副会長	川瀬 建	2174	東宮 総代	
副会長	野田 貞明	2087	西宮 総代	
副会長	川瀬 銀一	3146	東組年行事長	
副会長	野田 清治	2620	西組年行事長	
幹事	青井 康夫	2889	北山町内会副会長	川瀬 銀一
幹事	木 全孝治	3957	渡 第1組長	野田 清治
幹事	川瀬 茂夫	2858	渡 第2組長	
幹事	井上 英雄	3019	渡 第3組長	
幹事	野田 修身	2507	渡 第4組長	
幹事	川瀬 宣	3663	渡クラブ会長	
幹事	川瀬 涉	3622	渡中クラブ会長	
幹事	野田 武男	2662	渡嘉クラブ会長	
幹事	川瀬 弘靖	4518	消防分団長	
幹事	川瀬 昌司	3021	子供会会長	

4. 「川まつり」一口メモ

本欄は、冊子「川島の川まつり」の発行（昭和61年12月）にあたり、保存会の役員の方（東組・西組それぞれ3名）に、若い頃の「川まつり」の思い出について語ってもらい、それをメモにしたものです。紙面の都合等で全部を載せられなかったことをお許し下さい。



東西のやま（昭和22年頃）

昭和61年川まつり保存会幹事
老人クラブ「渡嘉クラブ」会長

野田 三 男さん

私が「川まつり」を体験していた頃は昭和1ケタの時代でありましたから、もうかれこれ50年以上にもなり大変なつらく思います。当時の渡・北山地区での最大の行事はなんといっても「川まつり」であったと思います。

渡・北山地区に生まれた男児として、このまつりに参加しなければ責任が果たせませんし、本人や家族も大変な事になりかねませんでした。

今の時代から思えばとても想像できない厳しい「きまり」の中で行っていました。したがってまつりの練習日から千秋楽までの約15日間は、緊張の連続でありました。まつりが終わるとほんとうにほっとしたものです。

しかし、あれだけの「まつり」を、少人数でしかも事故のないように、又西組、東組互に競争してやるには、それなりの「きまり」は必要であったと思います。まつり期間中の「若者」はギリギリの15日間でした。

この規律と団結がある意味では、渡・北山地区が事に臨んでまとまって来たゆえんであろうと思います。

再びこの「川まつり」が若い人たちの手によって呼び興されれば大変うれしく思います。

昭和61年 東組宮總代

川まつり保存会副会長

川 瀬 清兵衛さん

毎年、春や秋になると高山祭り祇園祭りの「やま」がテレビで放映されます。私はこの画面を見てると、ふと渡の「川まつり」を思い出さなくちゃいけません。高山祭りや祇園祭りの「やま」は合車の上にやまが乗っていますが渡の川まつりの「やま」は舟の上です。これらの「やま」との比較はできませんが、伝統ある立派なものです。私は、若衆の後半は兵役でしたから一番下の「小若」の体験もっていますが、厳しく鍛えられたものです。又どこの家でも、うちの息子が人前で恥をかかないよう、「小若」に入る頃から父親や兄が笛や太鼓を前もって教えてもらったものです。私は兄が笛をやっていたから笛をえらびました。兄は蕨かきの仕事をしながら、その傍で私に笛を教えてくれた記憶があります。大変なつかり思います。このたびこの「川まつり」の保存会が出来、私も今年は「お宮」の役員の関係上保存会にも係っていますが、昔のような運営はできませんが、地区民の総意で未永く保存できますよう願っております。

昭和61年老人クラブ「渡中クラブ」会長

川まつり保存会幹事

川 瀬 涉さん

渡・北山地区の「川まつり」がなくなってもう20数年がたちます。最近あちこちの町や村で、こういった伝統行事を復活させる気運が高まり再現されたものが数多くあるようです。近くでは、小網町が「小網太鼓」を子ども達に伝承されているようで大変結構な事と思っています。渡・北山地区の「川まつり」は、それはもう、若衆はもちろん、村中が丸となってやってきましたので、この地区に住んでいる人で40代以上の男子は、多かれ少なかれ厳しい規律の体験もっておられます。私は、途中兵役がありましたから若衆の全期間（10年）参加したわけではありませんが、子若の頃など「まつり」期間中はビリビリしておりました。あれだけの規律があったらこそ、あのスケールの大きい「川まつり」が出来たと思います。

今は時代も違いますので、そのままのかたちでは出来ませんが、出来れば私たち大人で充分準備をし、子ども達も仲間に入れて、この「川まつり」が再現できればとおもっています。

昭和61年渡町總代

川まつり保存会会長

川 瀬 銀 一さん

私の「川まつり」の体験は、ほんの短い期間でした。私は学校を出るとすぐ町外へ奉公に出してしまったからです。又、そこから兵役に就き終戦になって復員してからやっとこの「川まつり」に参加しました。その時は、まつりの係も一番うへの「出頭」に位置する年令で、4年間の体験にしかすぎません。

当時は、敗戦直後のこととて、物資も乏しく、特にまつり元に入った「当元」や、その親せきは大変であったと思います。まつりの費用も、弁金のほか蕨や麦を寄付（蕨奉賀、麦奉賀）してもらい運営費にあててやっていました。これらの思い出は大変なつかり思います。

今年、この「川まつり」を後世に伝えていくため、渡・北山両地区住民総意で保存会が出来ました。会長は渡町總代が兼ねることとなり、今年私がその職をつとめることになりました。当面の仕事は、道具類を保存展示する「やかた」の建設です。地区住民の協力を得てできるだけ早く実現したいと思っています。

昭和61年西組宮總代

川まつり保存会副会長

野 田 武 勇さん

私達の若い頃は、兵役があったり、又長男以外は、小僧や丁稚奉公で町外へ出るものが多く、「川まつり」に参加する全期間（10年）を体験したものはほとんどいませんでした。私も三等組（西組の祭礼係は一番下が五等組、一番上が一等組）の時に兵役につきましたから比較的下の方の役だけ体験しました。この川まつりを体験したのもなら誰しも「規律が厳しかった」ことを体験しておられると思います。たしか上の学校（今の高校）へいくということで、祭りに参加する、しないといった事など、ざくざくしたような話も聞いておりました。私の場合は、下の方の組だけ体験のあと、兵役につきましたから、兵隊の規律などそんなに厳しいものではなかったように記憶しております。今思えば、若き日のなつかしい思い出になります。今の時代ではとても昔のような運営方法はできませんが、折角保存会でもきましたので、みんなの総意でこの「川まつり」が伝承できればうれしく思います。

昭和61年町文化財保護審議会

川まつり保存会副会長

野田 薫さん

20数年前からあの美しい姿を見ることが出来ない渡・北山地区の「川まつり」に関する資料集が、この度、町ふるさと史料館から発行されると聞き、大変意欲深く思います。と言いますのも私、町文化財保護審議委員を仰せ付かって今年で8年になりますが、この間いつとなくこの「川まつり」に興味と関心を寄せているからです。又、今度も私が若い頃とっておいた「川まつり」の8ミリが役に立ったと聞きうれしく思います。

この「川まつり」の行事は、地理的にみて大変厳しい木曾川の中州に住みついた先人達が、どんな思いや、願いをこめてやってきたのでしょうか。私も若い頃この「川まつり」の「若衆」として参加し、体験をしておりますが、更に保存されている古い文書やあるいは、古老の人々の話を聞いておきますと、昔の渡・北山地区独特の風習、しきたり、など当時の生活環境の厳しさがうかがえ、貴重なものと思います。

昭和61年12月には、この「川まつり」のやま（道具類）が、文化的にみて価値あるとのことで、川島町有形民俗文化財（第1号）指定されました。これを受けて今、地元でも保存の気運が盛り上がり、地区民総参加の保存会もすでに結成されました。保存会の最初の仕事は「川まつり」の道具類を保存展示するやかたの建設で、その準備も、整いつつあります。私は何としても、先人が嘗々と奮んで来たこの伝統行事をいつの日か再現し、次の世代に伝えたいと願っています。

5. 文化財の指定

昭和60年12月25日、羽島郡四町教育委員会第10回会議が、羽島郡四町教育委員会事務局会議室において開催された。この会議で、第19号議案「川島町指定有形民俗文化財の指定について」協議され、原案どおり「川まつりのやま」が川島町指定の有形文化財として申請通り承認決定された。

<資料1>

「川島町指定文化財」指定物件概要

1. 川島町指定文化財候補物件（有形民俗文化財）

(1) 名称	川島町渡町「川祭り」のやま	2艘
	付 小道具	176点
	記録文書	135点

(2) 所有者（申請者）

羽島郡川島町渡町
総代 野田 武 男

(3) 審議経過

木曾川の中州に存在する川島町の歴史は、正に木曾川の水との闘いであったと云っても過言ではない。各町内には水神様が祭られ水難から守る川祭りが行なわれてきた。その中で、渡・北山町の川祭りは、2艘（東組・西組）のやまを出し、はやしを打ち盛大に行われてきた。その歴史は享保年間から始まったと言われ昭和38年まで続いたが諸般の事情により中止され、川祭りに関わる諸道具は、渡町（東組・西組）の各家庭に分散して保存され現在にいたっている。ここ数年來、歴史的にも貴重なこの渡・北山町（東組・西組）川祭りの「やま」・祭礼諸道具を川島町の文化財に指定し、長く後世に残そうという気運が地元中心に盛り上がりてきて文化財保護審議会でも話題となる。

昭和60年4月18日 川島町文化財保護審議会において、四町教育委員会の調査資料「川祭り」（昭和60年3月発行）をもとに正式な審議議題としてとりあげる。

同年5月20日・6月20日と審議会を開催し、今後の調査の方向を検討。

昭和60年7月25日 渡町町総代 野田武男氏より文化財指定の申請が出る。

昭和60年8月2日に申請書にもとづいて、四町教育委員会より川島町文化財保護審議会に諮問 (羽四教第1559号)

諮問にもとづいて文化財保護審議会では現地調査を計画し、同年9月10日審議委員・東西年行事係、四町教育委員会社会教育主事 市原信治・三尾悟による調査。調査は東組西組に保存されている預かり台帳をもとに各家庭を尋ね、台帳との照合・保存状態の確認、写真撮影を行なう。

昭和60年9月25日 文化財保護審議会において、現地調査の結果について検討した結果、ほぼ完全な状態で保存されていることを確認。(調査結果の台帳

を作成)

昭和60年10月4日 審議委員・渡町(総代・祭礼元・年行事・宮総代) 四町教育委員会社会教育主事市原信治・三尾信による祭礼小道具の調査。(小道具台帳作成) 祭礼記録文書は、市原信治が確認。(祭礼記録文書台帳作成)

昭和60年12月20日 川島町文化財保護審議会で最終審議し、川祭りのやま(小道具・記録文書を含めて)の町文化財指定についてこれを適当と認める。

(4) 物件の内容

川島は、木曾川が網状になって流れる川中島であった。ここに住む人々は、長い間、川の影響を大きく受けて生活してきた。度重なる洪水に悩まされるこの地域では、各町に水神様がまつられていた。そして、水神様の川祭りは、水難から守る願いをこめ古くから続けられてきた。昭和38年まで続けられた川島町渡・北山町の川祭りは、毎年7月末、やまが、東西2艘出されはやしを打ち、盛大に行われていた。やまが出る川祭りは、川島町の近くでは、円城寺、松倉、三ツ矢、宮田、大山などで行われていた。

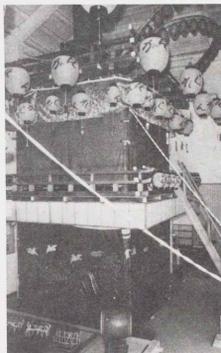
川祭りのやまは、中央に半円山型の365個の提灯を飾りつけ、さらに中央高く志柱を立て、ここに12個(閏年は13個)の提灯をかかげている。この点、津島祭りとは似ており、渡・北山の川祭りは、木曾川にそい津島から伝承されたものと考えられる。祭りのはじまりは、はっきりしないが、享保年間の木曾川の大洪水からはじめられたと伝えられている。川祭りには、笛、太鼓によるはやしが行われる。記録として古いものに、安政4年の「東組雑用帳」がある。

現在、川祭りのやまの道具は、渡の民家に分散して保存されている。また、祭りの小道具、記録文書は、宮倉庫に納められている。

6. 川まつり資料館の建設



川まつり資料館



東組(雄やま)



西組(雌やま)

<資料2>

第 九 号

羽島郡川島町有形民俗文化財指定書

物件及び数量 川祭りのやま 貳艘
付 小道具一七六点
記録文書一三五点

所有管理者 佐野智高 川島町渡町

氏 名 佐代 野田武男

右のものを羽島郡川島町文化財保護条例の規定により羽島郡川島町有形民俗文化財に指定する

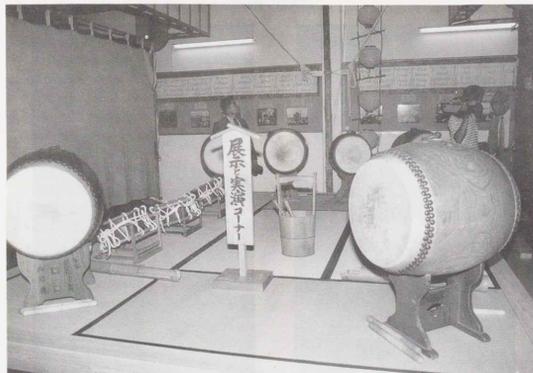
昭和六十年十二月二十五日

羽島郡四町教育委員会





展示コーナー



展示と実演コーナー

(資料1)

殿

昭和62年3月1日

川まつり保存会

会長 川 瀬 宣

川まつり資料館建設にともなう協力依頼

早春の候、貴殿にはご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

このたび、渡・北山町に伝わる「川まつり」を保存するために、仮称「川まつり資料館」を建設することになりました。つきましては、「川まつり資料館」建設の趣意をご理解いただき、貴殿にご協力をお願い致す次第です。

川島町に生まれ、渡・北山町に在をもたれる貴殿には、川まつりについてはご存じの事と思いますが、木曾川に囲まれた川島には、水神様が祭られ、水難から郷土を守る願いを込めた、川まつりが行われて来ました。その中でも渡・北山町の川まつりは、二艘のやまで、お囃子を打ち鳴らし盛大なものでした。

享保年間に始まったと言われ昭和38年まで続いてきましたが、木曾川の改修工事等による河川の関係で中止され、現在では、川まつりの諸道具は多くの家庭に分散保存されているのが現状であります。

この貴重な郷土遺産を復元し、永く後世に伝えていこうという気運が地元を中心に盛り上がり、様々な調査が行われ、昭和60年12月に川島町第1号の文化財と指定され、昭和61年7月30日に渡・北山町全住民総意によりまして、「川まつり保存会」が設立(別紙「川まつり保存会会則」)し、今日の「川まつり資料館」建設に到ったわけです。川まつりの歴史・文化財指定までの詳しい経過につきましては、同封させて頂きました資料「川島の川まつり」をご参照頂ければ幸いです。

資料館の建設費につきましては、地元の渡・北山町の全家庭の賛同を得て現在積立をしており、町当局からも補助をいただく予定ですすめています。別紙の図面でお分かりのように大変大きな建物が必要であり、建設費が不足しているのが現状です。

生まれ・育んだ故郷の地に先人の偉大な文化遺産があり、それが今姿をなし、後世の人に残されていく。この喜びを貴殿にもご理解いただけたらと思ひ、出費多端な折とは存じますが、ご協力をお願い致す次第です。

なお、ご協力いただけたら、その好意を建設しました「川まつり資料館」の中に永く記録していきたいと思っています。

記

1. 建設期間 昭和62年5月1日～62年7月30日までを予定
2. 建設場所 渡町八幡神社境内
3. 寄付金額 1口1万円とし（1口以上お願いします。）
4. 寄付受付期間 昭和62年3月10日～62年8月末日までとする。
5. 寄付金納入方法 同封の振込用紙を使用して送金して下さい。
6. 同封文書
 - ・小冊子——川島の川まつり——
 - ・仮称——「川まつり資料館」の図面
 - ・川まつり保存会会則

連絡先	川まつり保存会会長	川 瀬 宣	渡 町 総 代	電話 3 6 6 3
	川まつり保存会副会長	青 井 俊 彦	北 山 町 総 代	電話 3 9 3 2
	川まつり保存会副会長	川 瀬 銀 一	渡 町 総 代 代理	電話 3 1 4 6
	川まつり保存会副会長	野 田 薫	文 化 財 委 員	電話 2 1 0 8

(資料2)

川まつり保存会各位

昭和62年3月

川まつり保存会会長 川 瀬 宣

川まつり資料館建設について

陽春の候、貴職には、益々ご健勝とお過ごしのこととお喜び申し上げます。
日頃は「川まつり資料館」の建設につきましては、格別のお力添えを賜り、厚くお礼申しあげます。おかげさまで、皆様方のご協力により、いよいよ「川まつり資料館」が建設の運びとなり、設計図も完成しました。

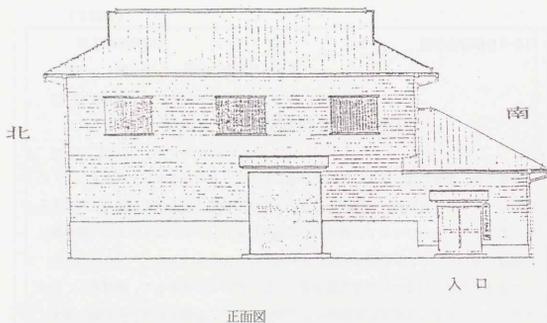
つきましては、川まつり保存会監事会で下記の内容につきまして、検討致し、決定させていただきますので、ご報告し、今後の一層のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

記

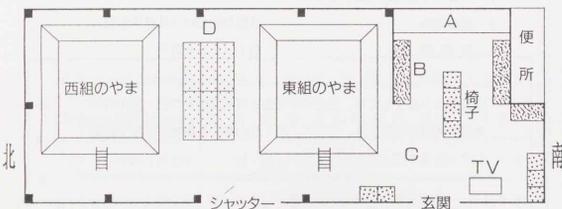
- 1 入札予定 昭和62年3月中
- 2 川まつり資料館完成予定日 昭和62年7月中旬
- 3 建設場所 八幡神社境内（社務所北側）
- 4 建設費 約1,200万円

建設費につきましては、会員の積立金と町補助金及び渡・北山町以外の町外の方の寄付金、並びに、渡・北山町の特別寄付金を予定致しております。

- 5 完成予定図（右図） 設計図の一部を掲載させていただきました。
（正面図と平面図）



正面図



A/展示台 B/展示ケース C/ロビー D/実演・お囃子コーナー

平面図

川まつり資料館着工

川島町 7月30日完成へ

山車復元し展示

渡町などの
住民など
保存運動が実る



資料館に復元して寄贈展示される川まつりの「やま」

町の歴史資料館、町内の金蔵など
の歴史資料、川島町の歴史資料
など計五百万円の寄贈が、七月
廿三日、川島町の「やま」の
神社境内で、川島町の歴史資料
館に寄贈された。この寄贈は、
川島町の歴史資料館の開設を
記念してのものである。この寄
贈は、川島町の歴史資料館の
開設を記念してのものである。
この寄贈は、川島町の歴史資料
館の開設を記念してのもである。
この寄贈は、川島町の歴史資料
館の開設を記念してのもである。

川まつり資料館竣工式

- ・とき 昭和62年7月30日(木)
午前10時～11時30分
- ・ところ 渡北公民館

〔式次第〕

全体進行(野田政光)

1. 開式のことば 川まつり保存会副会長 川瀬銀一
2. 主催者挨拶 川まつり保存会会長 川瀬宣
3. 建設経過報告 川まつり保存会副会長 野田薫
4. 感謝状贈呈 川まつり保存会会長 川瀬宣

エーザイ川島工園外28名殿
賀賀田工務店殿
小島設計事務所殿

5. 来賓祝辞 県議会議員 古田好殿
川島町長 野田知澄殿
川島町議会議長 川瀬巧殿
教育長 西脇成紀殿

〔祝電披露〕

6. 閉式のことば 川まつり保存会副会長 青井俊彦

テープカット

県議会議員 古田好殿
川島町長 野田知澄殿
川島町議会議長 川瀬巧殿
教育長 西脇成紀殿
川まつり保存会会長 川瀬宣殿

会場図



来賓席(100人)

入口

一般席

(資料4)

竣工式挨拶

昭和62年7月30日

川まつり保存会

会長 川瀬 宣

本日は皆様方には公私共ご多忙のところ古田県議さんを初め多数の来賓の方々の御臨席を得ましてここに盛大に川まつり資料館竣工式が挙行できますことを保存会一同心より嬉しく思う次第でございます。

この資料館建設は私も住民にとりまして長い願いでございました。その会館が建設できましたことは、ひとえに町当局をはじめ本日御列席の皆様方のおかげでございます。本当に有難うございました。厚く厚く御礼申し上げます。

又乏しい資金の中で設計や施工を担当してカーぱいの御努力を頂きました業者の方々に對しましても深長なる謝意を申し上げる次第でございます。

当資料館の建設趣意や経過等につきましては後程報告されますので省略させていただきます。町文化財に指定をうけています。川まつり「やま」の保存もこれで完璧となり先人に対しましても責任の一端が果たせたようにさへ思っております。

どうか今後この資料館運営に関しましても相変わらず何かと御指導ご協力がいただけますようお願い申しあげましても私の挨拶に代えさせていただきます。



資料館竣工式



資料館テープカット

川まつり資料館竣工に伴う経過報告

川まつり資料館の竣工に至る迄の経過の概要をご報告申し上げます。

私達の先人は木曽川の流れと密接に結びついた、たゆまない歴史のなかで生き続け今日に至ったのであります。生活においては、川業などの生業に於いて、木曽川の水の恵みを受容し、反面、度重なる木曽川の氾濫によって人命、財産が脅かされてきたところでもあります。川島地内での、この木曽川との深い繋がりが昔からの水神を崇拜する大衆の信心ともなり、松倉・河田・西光坊・松原・渡などの各地で伝統と由緒を誇る川まつりが連続と続いてまいりました。しかし、時の推移と共に其の雄姿が徐々に消滅し渡地区の川まつりのみが伝承されてきた次第でございます。渡・北山地内の川まつりは、毎年7月30日に木曽川南派川の中流を舞台に東西二そうの「やま」が昼は暮、夜は提灯で美しく飾り、若衆・中老の乗船の元に笛、太鼓等ではやしたてながら川を上下し、夜は大・中・小の多数の提灯を点灯し、川面に美しく映える様は、優雅にして豪快であり観る人達を幻想の世界に誘いこんだものであります。この、古式ゆかしく厳肅な行事が永年にわたって存続出来たのは、老人から若者に至る幅広い年代層の人達の心の触れ合い、助け合いが生き続けてきた結果であると言えます。そもそも川まつりは、今から約二百年程前の享保年間、木曽川に大洪水があったから始められたと伝えられております。そうした、長い伝統を守り、盛大に行ってまいりました川まつりも、昭和38年木曽川南派川の堤防の改修工事に伴い、川の地形が変わり、やむなく中止となり、以来二そうの「やま」の道具や記録文書等は、町内の各家に分散保存して大切に保管されてきました。これは、地域の貴重な財産を火災・水害から守るための先人の素晴らしい生活の知恵であったと思います。この貴重な財産を一か所に保存し、散逸の恐れなく、安全に後世に伝承していく事が現在の私達に与えられた責務であると信じ、それ以降川まつりの「やま」の文化財的価値と保存について町当局に陳情し指導を受けてまいりました。その結果、昭和60年12月25日付けをもって川島町指定の第一号の文化財、「有形民俗文化財」に指定され、私達地元喜びの上なく、その保存に一段と力が入り、61年7月30日、渡・北山町住民の総意により「川まつり保存会」が結成された次第であります。その後度々会合が持たれ、川まつりのやまを収蔵する館の建設計画をたて、関係方面に相談すると同時に会員で

建設資金の積立をはじめました。62年3月に町当局からの補助金も決定し、又、本日まで出席の多くの方々より格別のご援助を賜り、館の建設に入った次第であります。会館の設計は小島設計事務所、施工は株式会社賀真田工務店にお願ひし、62年5月1日に起工式をとり行ひ、本日ここに「川まつり資料館」と命名し、立派に完成致し、竣工式を迎えるに至ったわけであります。敷地面積は120平方米・棟までの高さ9米あり、内部は「やま2そう」の展示室古文書・祭礼道具展示コーナー・実演コーナー等を設置し休憩所にはビデオで当時の川まつりの様子を再現できるように配慮致しました。なお、「川まつり資料館」の設置費につきましては、

事業費の総額	1,600万円
内	
工事費	1,250万円
設計管理費	50万円
備品費	180万円
諸経費	120万円
財源としまして	
町補助金	600万円
寄付金	500万円
地元積立金	500万円

の計1,600万円でございます。

この資料館の建設は私共地元民の長年の夢であり念願でもございましたが、それがここに立派に実現出来た事は、町当局を始め本日ここにご臨席の多くの皆様へ深い御理解と御支援の賜りもでございます。

此の「川まつり資料館」が単に渡・北山町内の財産でなく、川島町全体の貴重な文化財遺産として、後世に伝承し、活用を図る事が今後の責務と考えております。どうか皆様方にもこの資料館を川島町の一つの誇りとして、遠方の方々にもご紹介いただき活用くだされば幸甚に存じます。今後とも一層のご指揮、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昭和62年7月30日

川まつり保存会副会長 野田 薫

7. 川まつりおはやし復元奉納

おはやし復元奉納
(未来博88出演リハーサル)



と き 昭和63年7月31日(日)
午前9時30分～正午
ところ 渡町神明神社境内

主催 川まつり保存会
後援 川島町
後援 渡・北山町

25年ぶりおはやし復活

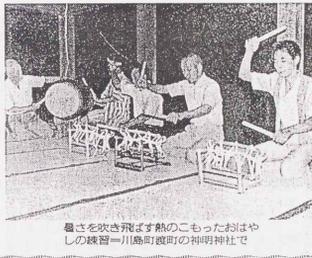
川島町の川まつり

羽郡渡島町の渡町、北山町の年越し川まつり保存会(川保会)が、渡町の神明社境内で、昭和二十八年以来途絶えてしまっていた川まつりのおはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。川まつりは、神明社の祭りで、江戸時代、毎年正月三十、三十一の両日行われていた。おはよしの保存会が、おはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。川まつりは、神明社の祭りで、江戸時代、毎年正月三十、三十一の両日行われていた。おはよしの保存会が、おはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。

毎晩、笛や太鼓の特訓

保存会 未来博出場がきっかけに

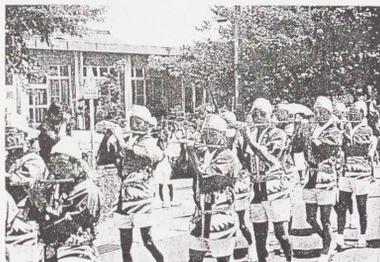
川島町の川まつり保存会が、今年、夕暮後の渡町で復活させた。川まつりは、神明社の祭りで、江戸時代、毎年正月三十、三十一の両日行われていた。おはよしの保存会が、おはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。川まつりは、神明社の祭りで、江戸時代、毎年正月三十、三十一の両日行われていた。おはよしの保存会が、おはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。



暑さを吹き飛ばす熱のこもったおはよしの練習＝川島町渡町の神明神社で

練習で、二十五人前後、年長を二、三人、体で覚えたい。熱のこもったおはよしの練習。川島町の川まつり保存会が、今年、夕暮後の渡町で復活させた。川まつりは、神明社の祭りで、江戸時代、毎年正月三十、三十一の両日行われていた。おはよしの保存会が、おはよしの復活に、今年、夕暮後の渡町で復活させた。

おはやし 25年ぶり復活



25年ぶりに*再現。された羽島郡川島町の川まつりのおはやし*道行き。=同町渡町、神明神社

昭和三十八年を最後に途絶えていた羽島郡川島町の川まつりのおはやし「道行き」が、この夏、未来博に出陣し、ハルサレを継ぎ、同町渡町、神明社へ存続された。

独特の音色奏で奉納 29日、未来博会場で披露

川まつりのはやしは、水難防止を願った舟の七本を、おはやしを水神に奉納するもの

川まつりのはやしは、水難防止を願って、江戸時代から毎年七月二十、三十一の両日に、川に浮かべられていた。若者が村の中を練り歩く、川に浮かべた舟の七本を、おはやしを水神に奉納するもの

だが、木曾川の河川改修で川床が上がってしまっただけで、おはやしは途絶えてしまった。昭和三十八年を最後に途絶えていた。このおはやしは、未来博に出陣し、ハルサレを継ぎ、同町渡町、神明社へ存続された。

川まつりのはやしは、水難防止を願って、江戸時代から毎年七月二十、三十一の両日に、川に浮かべられていた。若者が村の中を練り歩く、川に浮かべた舟の七本を、おはやしを水神に奉納するもの

おはやし

おはやしは、通称「道行き」と言い「オカジャラキ」「しんぐるま」「新道行き」「本道行き」「シャギリ」の五曲をまとめて道行きと呼び、受け継がれてきました。この曲は200年以前の昔から親から子、子から孫へと口と手と体で伝承されてきましたが、その楽譜は誰も知らないのが実態です。

当時としては、五穀豊穡、水難防止など一年のお礼とお願いを込めて、毎年7月30日（本祭り）、7月31日（後祭り）の2日間、若者達が村中の道を練り歩いたり、川に浮かべた5そうの舟の上に木で組んだ「やま」の中ではやし、水神様に奉納したものです。

このおはやしは、木曾川の河川改修で河床が上がってしまったのと、伝統を受け継ぐ若者が少なくなり、川まつりの「やま」が組めなくなったため、昭和38年を最後に姿を消しておりました。

ところが、昭和60年12月に羽島郡四町教育委員会から「川まつりのやま」が有形民俗文化財に指定され、これを契機に昭和61年には「川まつり保存会」が結成され、川まつり資料館も建設され「やま」が保存されました。

こうしたことが反映して地元の人達からおはやし（道行き）の復元の気運が高まり、有志の皆さんの熱意とご努力と奉仕によって、20数年振りに復活にこぎつけ、今日ここに再現することが出来ました。

また、このおはやし（道行き）は川島町郷土芸能の一つとしてぎふ中部未来博88（8月29日午後1時から）に出演披露することになっております。

昭和63年7月31日

川まつり実行委員会
進行委員長 野田 薫

川まつりおはやし実行委員会

会 長	川 瀬 演	(保存会会長)	渡 町 総 代
東組総指揮	川 瀬 渉	(保存会副会長)	年 行 事 長
西組総指揮	野 田 五 作	(")	"
進行委員長	野 田 薫	(")	文化財保護委員
準備委員長	川 瀬 宣	(")	渡町総代理
準備委員	野 田 守 男	(保存会幹事)	第 一 班 長
"	高 橋 勉	(")	第 二 班 長
"	川 瀬 稔	(")	第 三 班 長
"	野 田 鉄 治	(")	第 四 班 長

お は や し (復元)

1. 神主のおはらい
1. 主催者のあいさつ 会長 川 瀬 演
1. 来賓のことば
1. 道行きの実演奉納 東・西組
1. 舞台(拝殿)での実演 東組(先)西組(後)

特 別 出 演

1. 民 踊 民踊同好会
高齢者民踊教室
民踊愛好会

東 組 おはやし出場者名(順不同)

東組年行事

川 瀬 渉 川 瀬 宣 川 瀬 演 川 瀬 清兵衛
川 瀬 金彦 川 瀬 宗 川 瀬 又彦

太 鼓

川 瀬 春 治 川 瀬 義 之 川 瀬 七 雄 川 瀬 実
川 瀬 孝 吉 川 瀬 孝 弘 川 瀬 福 男 川 瀬 登
川 瀬 允 義 川 瀬 義 彦 川 瀬 治

笛

川 瀬 浪 男 川 瀬 稔 川 瀬 宗 夫 川 瀬 清 昭
川 瀬 信 治 川 瀬 則 夫 川 瀬 孝 雄 川 瀬 武 充
川 瀬 照 行 川 瀬 達 巳 川 瀬 昌 司 川 瀬 正 貞
青 井 俊 彦 川 瀬 克 巳 高 橋 勉 岩 田 達 彦
青 井 敏 之 川 瀬 賢 吉 川 瀬 訓 昭 川 瀬 清 司



西 組
おはやし出場者名 (順不同)

西組年行事

野田 五 作 野田 利 夫 野田 文 字 野田 克 己
野田 悦 夫 野田 好 春 野田 幸 雄

太 鼓

野田 守 男 野 田 貴 野田 真 志 野田 春 近
野田 勝 己 野田 清 治 野田 鉄 治 野田 一 道
野田 勝 明

笛

野田 富 司 野田 昌 弘 野田 広 行 野田 三 千 一
野田 紀 元 野田 五 男 野田 郁 男 野田 喜 久 雄
野田 敏 雄 横 山 勝 利 野田 正 光 野田 武 治
野田 杉 男 野田 森 一 野田 之 治



ぎふ中部未来博会場 (岐阜市)



川島町の未来博・出演時間割表

川まつり保存会

12:30	10分	川島町	町長 開会の辞	
12:35	60分	モンメール	人形劇 昔語り 川島はなし	
13:35	25分	小網	小網 太鼓	
14:00	25分	渡町	川まつりおはやし 道行	
14:25	20分	民踊クラブ	民踊	
14:45	20分	渡町	西組おはやし (舞台)	2時間
15:05	20分	民踊クラブ	民踊	
15:25	20分	渡町	東組おはやし (舞台)	
15:45	5分	川島町	町長 閉会の辞	
15:50				

- 注意点
- 道行の衣服は 羽織り、袴、白タビ、ワラゾウリ
 - 舞台での衣服は ハッピー、ハチマキ白タビ

無料サービス

- ・ボンハゼ (岐南町) 10:00~14:00
- ・鮎ニューメン試食 (川島町) 11:00~
- ・みそぎもち (笠松町) 11:00~
- ・ところてん・かんでん (〃) 12:00~13:00
- 14:00~15:00
- ・冷凍イチゴ (柳津町) 13:00
- ・わたがし (川島町) 15:00~

当日(8/29)出演者の日程

川まつり保存会

月日	時刻	活 動 内 容
8/28		出場のための道具の準備
8/29	8:00	集合(渡公民館前に7:50) 出発(8:00)
〃	9:00	会場着、各自の持ち物を控室へ
〃	9:10	未来博見学(自由行動)
〃	13:30	控え室集合・準備・着替え
〃	14:00	出演『道行』
〃	14:45	西組 出演
〃	15:25	東組 出演
〃	15:45	演技 終了
〃	16:00	控え室にて着替え 未来博見学(自由行動)
〃	18:00	集合(南ゲート17:50までに)・帰路に着く
〃	18:40	渡町着(予定)・解散

注 意 事 項

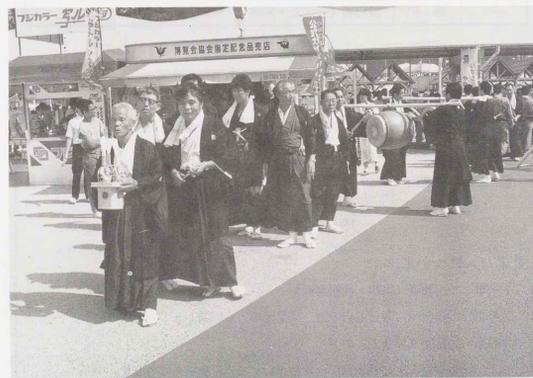
- ① 出演用の衣服は各自でご持参下さい。
- ② 昼食、飲食代として¥1500円をバスのなかでお渡ししますので、各自で済ませるようお願いいたします。
- ③ 渡町到着後、ハッピー・ハチマキ・帯・足袋、並びに借りた方は、羽織・袴を返納して下さい。

乗車バスについて

- 1号車 出演者(東組・西組全員)
- 2号車 年行司 子ども会の方 (民踊の方も同乗します。)
- 5号車 応援(付き人)の方
但し、入場料及び昼食代については自己負担となります。



道行き(東組)



道行き(西組)



舞台での実演(東組)



舞台での実演(西組)

25年ぶりに復活した川島町の川まつりの道行きで
威勢よく太鼓を打つ人たちがふるさと広場近くで



伝統の伏屋獅子芝居も

川まつりには、町町裏北山
地区江戸時代からある祭
り、水神の祭りだったが、伝
承する者がなくなり、河
川改修で川の水が少なくな
るや昭和三十八年を境に
姿を消していった。
川まつり実行委員会副会長
尾が底力、この目的のために
練習を重ねてきた。町職は
かまのや十八人が舞臺をい

し盛り上げ。また、子供
会や町社が小幡太鼓、獅子
舞の準備も好評だっ
た。



羽島町川島町を、江戸時代の語源で、郷土神を祀る祭りと、
北河内郡川島町(野)の(一)祭りと、祭名は一定。

威勢よし、復活の川まつり

羽島郡の日

8. 川まつりのおはやし

享保年代から伝わる川まつりのおはやしは、「オカジャラキ」「しんぐるま」「新道行き」「本道行き」「シャギリ」の五曲を以って「道行き」と言われ、幾星霜も続いてまいりました。しかし、その曲は親から子へ子から孫へと受けつがれたもののその原点たる曲の資料は一切ありません。現在では、六十路に近い方のみしか知られておらずこのままでは近い将来には忘れ去られ先人達の苦労が水の泡と化してしまう事になると思います。

そのため、下記記載の方々の御協力により曲に楽譜を付け作製を致しましたが採譜技術は何分にも素人であり又、それぞれが皆「師」が違いますので、曲についてはいろいろと疑問点もあるかと思いますが後世に残す一つの資料となれば幸甚でございます。

今日迄に調査致しました所、始めた当時としては村中で「道行き」のみを神に奉納されており、其の後に人家も人も多くなり人の心も豊になり、道を境に東組・西組とに別れ出合の「道行き」が始められ幾年月かの後、舟業を職とする地元民であるややかでゆうびな川での「やま」が出されたと思います。

そのため東西に別れた曲も長い年月の間に多少変化したものと考えられます。

文化財保護審議会委員 野田 薫

おはやし採譜作製協力者

	東組	西組
笛	高橋 勉	野田 広行
太太鼓(がく)	川瀬 義之	野田 守男
小太鼓(つけ)	川瀬 福男	野田 鉄治

(1) 東組 笛ことば

1. 「オカジャラキ」

ビー
 オーカージャラキ ジョンジョロシユシュ
 オーカージャラキ ジョンジョロシユシュ
 オーカージャラキ ジョンジョロシユ
 メーシーコーポイター
 コーポイター ヒャーヒフヒャー
 コーポイター ヒャーヒフヒャー
 ユーベモコーポイター
 マータコーポイター

2. 「しんぐるま」

ヒョロヒーヒコヒャヒコヒャー
 ヒョロヒーヒコヒャー
 ヒョロヒーヒャヒコ ヒャーヒコヒャヒャヒャヒャヒャヒョヒョー
 オーヒーヒャーフ ヒャーヒャヒャコ ヒャーヒコヒャヒャ ヒュヒュヒョー
 ヒーリヒーリヒ オーヒーヒャーヒコ ヒャーヒヒャララ
 ヒャーヒャーウー ヒャーヒャーウヒャヒョフ ヒャーヒコ
 ヒャーヒコ ヒャーヒコ ヒャーヒコ ヒャーヒャーヒャー

3. 「新道行き」

ヒーリヒーリヒャーヒコヒャ
 ヒーリヒーリヒャーウヒャーヒャ
 オーヒーヒャフ ヒーヒャフ
 オーヒーヒャフ ヒーヒャフ
 オーヒーヒャフ ヒャーヒャ

4. 「本道行き」

ヒーリヒーヒャヒコヒャ
 ヒーリヒーヒャ ヒコヒャ ヒャヒャヒーコヒャー
 オーヒーヒャヒャウルヒャウ ヒャヒャヒーコヒャー
 オーヒョウヒヨヒヨヒヨヒフ ヒヨヒヨヒヒャララ
 オーヒーヒャヒコヒャ ヒャヒャウルヒャウヒャーヒャ

5. 「シャギリ」

ヒリヒリヒリヒリ
 オヒリコ オヒリコ オヒリコ オヒリコ
 ヒャー・・・ ヒュ・・・
 ヒャヒャウル ヒャヒャウル オーヒー

(2) 東組 笛 (原譜)

1. 「オカジャラキ」

Incefnal flute

ビー オカジャラキ ジョシヨシヨシ オカジャラキ ジョシヨシヨシ

オカジャラキ ジョシヨシ ムシコボイ ター

コボイ ター ヒャヒャヒャー コボイ ター ヒャヒャヒャー

ユー ベ モ コボイ ター マタコボイ ター

2. 「しんぐるま」

ヒョロ ヒー コ ヒャヒコヒャ ヒョロ ヒー コ ヒャー

ヒョロ ヒャヒコヒコヒャー ヒコヒャ ヒャヒャヒャヒャヒャヒョヒョー

オ ヒ ヒャフ ヒャーヒャヒコ ヒャヒコヒャヒャヒャヒャヒャヒョー

ヒリヒリ ヒ オ ヒ ヒャヒコ ヒャヒャヒャー

ヒャヒャウ ヒャヒャウヒャヒャウ ヒャーヒコ ヒコヒコヒコヒコヒコ

ヒャヒコヒャー ヒャーヒャ

(7) 西組 笛 ことば

(1) 「オカジャラキ」

ビー
 オーカージャラキ ハヤハウルヒャーヒャ
 オーカージャラキ ハヤハウルヒャーヒャ
 オーカージャラキ ジョンジョロシュー
 メーシコーポイタータ
 コーポイターラ ハヤハウルヒャー
 コーポイターラ ハヤハウルヒャー
 ユンペーモー コーポイターラ
 マーターヒャハヤウル ヒャーヒャ

(2) 「しんぐるま」

トーヒーリーリコ ヒャーラララ
 トーヒーリーリコ ヒャーラララ
 トーヒーハヤウル ヒャーヒャヒャ ヒーコ
 ヒャーヒャー ヒヒ トーヒヨフ
 トーヒーハヤウル ヒャーヒャヒャ ヒヒヤ
 ヒコヒャハヤウル トーヒヨフ
 ヒーリ ヒーリヒ トーヒーハヤウル トヒヨヒコヒヨロン
 トーヒヨヒヨフー トーヒヨヒヨフーヒフ ヒャー
 オーカージャラキ ヒャーウル
 トーヒヨヒ ヒャーヒャーヒャ

(3) 「新道行き」

ヒーリヒーリヒャー
 ヒーリヒーリヒャーウル ヒャーヒャ
 トーヒーヒャフ ヒャーヒャフ
 トーヒーヒャフ ヒャーヒャフ
 トーヒーハヤウル ヒャーヒャ

(4) 「本道行き」

ヒーリヒーリー ヒャーヒャヒャヒーコ
 ヒーリヒーリー ヒャーヒャヒャヒーコ
 オーヒョヒーコ ヒヨロン
 オーヒーヒャヒャヒーコ
 オーヒョヒョヒーコヒヨロン
 オーヒョウ オーヒョヒョヒーコ
 オーヒョヒョ ヒョコ ヒヨロン
 オーヒーヒャーヒャヒャ ヒョコ
 オーヒョ ヒョヒコ ヒコヒャヒャ

(5) 「シャギリ」

ヒリヒリヒリヒリ
 オヒリコ オヒリコ オヒリコ
 ヒャー・・・ビー・・・
 ヒャハヤウル ヒャハヤウル
 オー ヒー

(8) 西組 笛 (原譜)

1. 「オカジャラキ」

Intermittent Flute

ビー オカ ジャラキ ヒャハウルヒャーヒャ オカ ジャラキ ヒャハウルヒャー

オカ ジャラキ ジョシヨロシュー メーシコーポイター

コポイターラ ヒャハウルヒャー コポイターラ ヒャハウルヒャー

ユンペーモ コポイターラ マターヒャハウル ヒャーヒャ

2. 「しんぐるま」

トーヒーリーリコ ヒャーラララ トーヒーリーリコ ヒャーラララ

トヒハヤウル ヒャーヒャヒャヒャ ヒョコ ヒャーヒャヒャヒャ トヒコフ

トヒハヤウル ヒャーヒャヒャヒャ ヒャーヒャヒャヒャヒャ トヒコフ

ヒーリヒーリ ヒ

トヒハヤウル トヒコヒャヒャ トヒコフ トヒコフヒャ

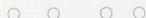
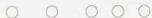
ビー オカ シャギリヒャウル トヒコヒャー ヒャーヒャ

「楽譜記号」

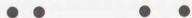
♩ーカウーカウーカウー



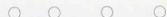
カ入カカ入カカ入カカ入カ



♩ーカウーカウーカウーカウーカ



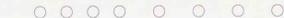
カ入カカ入カカ入カカ入カカ入



カーカウーカウーカウーカウー



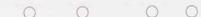
カ入カカカ入カカカ入カカカ入カカカ入カ



カーカウーカウーカウーカウー



カ入カカカ入カカカ入カカカ入カカカ入



カーカウーカウーカウーカウーカ



カ入カカカ入カカカ入カ 入 入



「楽譜記号」

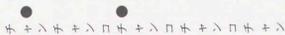
♩ーカウーカウーカウーカウーカ



♩ーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



カーカウーカウーカウーカウーカ



「ふきん」

ふきん ぶきん ぶきん ぶきん
 ちきん ちきん ちきん ちきん
 ○ ○ ○ ○

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ● ● ● ● ● ● ● ●

「ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん」
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ● ● ● ● ● ● ● ●

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ● ● ● ● ● ● ● ●

ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん ちきん
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「 」 ちきん ちきん

(11) 西組 上り下り (笛)

上り

1. フー^{マチ}ー^{マチ}ヒー^{マチ}ヒー^{マチ}ヒウー^{マチ}ヒヤー^{マチ}ヒヤー^{マチ}ヒヤウー^{マチ}ヒヤー^{マチ}ヒヤー
2. 返シ 中
3. フー^{上ゲ}ヒー^{下ゲ}ヒー^{一度上ゲ}ヒヨロ^{下ゲ}ヒヨ^{上ゲ}ヒウー^{上ゲ}トー^{上ゲ}ロー^{上ゲ}ヨシ^{上ゲ}ヨー
4. チ^{上ゲ}フー^中チ^{マチ}フー^{マチ}チ^{マチ}フー^{マチ}チ^{マチ}フー^{マチ}トー^中トー^上トー^上
5. トー^{上ゲ}ヒー^中ヒー^{マチ}ヤー^{マチ}ヒヤウー^{マチ}ヒヨ^中ロー^上ヒー^上ヨシ^上ヨー
6. ヒー^上ヒー^上ヒー^上ヒウー^上ヒー^上ヒウー^上ヒヨ^{マチ}ロー^{マチ}ヒヨ^{マチ}ロー
7. 返シ
8. フー^{マチ}ヒー^中ヒー^{マチ}ヒヨ^中ロー^{マチ}ヒヨ^中ヒウー^{マチ}トー^{マチ}ロー^{マチ}ヨシ^{マチ}ヨー

下り

1. トー^{上ゲ}ヒー^高ヒー^高ヒー^高ヒヤー^高ヒヤー^高ヒヤウー^高ヒヤー^高ヒヤー
 2. 返シ
 3. トー^{上ゲ}ヒー^中ヒー^{マチ}ヤー^{マチ}ヒヨ^{マチ}ロー^{マチ}ヒー^{マチ}ヒヤ^{マチ}ヒヨ^{マチ}ヒヨ^{マチ}ヒウー^{マチ}トー^{マチ}ロー^{マチ}ヨシ^{マチ}ヨー
 4. オ^低ヒー^{「間吹」}ヒー^{「間吹」}ヒウー^{「間吹」}トー^{「間吹」}ヒー^{「間吹」}ヒウー^{「間吹」}ヒヤー^{「間吹」}ヒヤウー^{「間吹」}ヒヤー^{「間吹」}ヒヤー
 5. オ^低ヒー^{「間吹」}ヒー^{「間吹」}ヒウー^{「間吹」}トー^{「間吹」}ヒー^{「間吹」}ヒウー^{「間吹」}ヒヤ^{マチ}ヒヨ^{マチ}
 6. フー^低ヒー^中ヒー^中ヒー^中ヒヤー^中ヒヤー^中ヒヨ^中ロー^中ヒヨ^中ヒウー^中ヒヨ^中ヒヨ^中ヒウー
 7. チ^{上ゲ}フー^{上ゲ}チ^{下ゲ}フー^{下ゲ}チ^{下ゲ}フー^{下ゲ}トー^{上ゲ}ヒー^{上ゲ}ヒヤー^{上ゲ}ヒヤー^{上ゲ}ヒヨ^{上ゲ}ロー^{上ゲ}ヒヨ^{上ゲ}ヒヨウー
 8. フー^低ヒー^中ヒー^中ヒー^中ヒヤー^中ヒヤー^中ヒヨ^中ロー^中ヒヨ^中ヒウー^中ヒヨ^中ヒヨ^中ヒウー
- トー^{上ゲ}ロー^{上ゲ}ヨシ^{上ゲ}ヨー

9. ま と め

渡・北山地区の川まつりは、ほとんど休みなく続けられてきた。明治時代、大水が出て不作のために休んだという伝えはあったが、とにかく長い間続けられてきた。

これは、第一にやまに使われる船がおそくまであったということ、また、東西2つのやまが出され、それぞれ東組(川瀬家)、西組(野田家)を中心としてかたまり、きびしい練習のもとに、2つの組が競争のように行ってきたことが長い伝統として残ってきたと考えることができる。

川まつり行事がはじまると、やまをつくり上げること、はやしを打ち鳴らすこともまた、夜の提灯つけも一方に負けまいとして行われてきた。そのため祭礼規則にも見られるようにきわめてきびしい練習であった。このことが、青少年を中心に村中の者が認めた上で行われてきたのである。

笛や太鼓の練習は、当家で集まって行われるが、それぞれの家でも子に伝え練習させてきた。

昭和38年まで続いてきた川まつりが、できなくなった大きな原因は、木曽川の改修工事で川島の北側が本流となり、渡の南を流れる川が南派川として川の地形が変わり水深が浅くなって川まつりのやまを進めることができなくなったからである。

10. 資 料

(1) 歴 代 の 当 元

調査 野 田 薫

年 代	東 組	西 組	年 代	東 組	西 組
文化7		信右衛門	天保5		市左衛門
8		柳右衛門	6		多兵衛
9		衆 蔵	7		興平治
10		甚 吉	8		勇四郎
11		和四郎	9		國右衛門
12		彦 蔵	10		喜代七
13		多右衛門	11		八郎次
14		庄右衛門	12	市次郎	
文政元		次 助	13	平 三	
2		幸 助	14	岳 三	
3		信右衛門	弘化元	兵右衛門	
4		豊 七	2	宇右衛門	
5		興兵衛	3		
6		繁 蔵	4	儀右衛門	
7		定 七	嘉永元	孫右衛門	
8		治郎右衛門	2	佐 三	
9		甚左衛門	3	嘉 三	
10		猶 蔵	4	利 三	
11		林右衛門	5	菅井 芳三郎	
12		代 吉	6	菅井 修 平	
天保元		彦 七	安政元	宇右衛門	
2		太平治	2	儀 三	
3		仙左衛門	3	七 三	
4		松 蔵	4	兵次郎	

年代	東組	西組
安政5	市次郎	
6	平三	
萬延元	國三	
文久元	徳兵衛	
2	幸助	
3	三三三	
元治元	清七	
慶應元	伊三	
2	安五郎	
3	利右衛門	
明治元	青井 弥九郎	
2	想助	孫三郎
3	清七	孫平
4	儀右衛門	文左エ門
5	青井 弥九郎	五右エ門
6	清三	忠助
7	弥兵衛	利三右エ門
8	利右衛門	吉三郎
9	市右衛門	丈吉
10	青井 長右衛門	林右エ門
11	安五郎	弥三郎
12	彦右衛門	新三郎
13	孫七	清左エ門
14	三三三	勇助
15	青井 弥九郎	庄右エ門
16	清三	代吉
17	兵吉	仙十郎
18	嘉十郎	助三郎
19	文右衛門	藤三郎
20	清八	勇七
21	青井 想九郎	久右エ門
22	清七	仲七

年代	東組	西組
明治23	青井 嘉傳次	文四郎
24	治兵衛	善三郎
25	八右衛門	定七
26	岩田 想助	甚九郎
27	市三	重平
28	青井 嘉太郎	民三
29	青井 長右衛門	五郎一
30	青井 嘉兵衛	文七
31	太三郎	忠助
32	嘉十郎	定吉
33	和四郎	太兵衛
34	長平郎	泰三郎
35	嘉助	裕藏
36	治兵衛	藤吉
37	青井 作右衛門	脇田 勇助
38	清七	寿三郎
39	幾次郎	中止
40	孫右衛門	与市
41	青井 泰三郎	仙左衛門
42	想四郎	与三市
43	久次郎	新太郎
44	佐七	新之丞
45	安五郎	幸之助
大正2	代五郎	藤五郎
3	七之丞	脇田 代吉
4	源兵衛	伊三郎
5	久五郎	庄右衛門
6	清五郎	条次郎
7	青井 弥市	織右衛門
8	進三	忠七
9	実治	勝治郎
10	青井 寒一	鉄次郎

年代	東組	西組
大正11	佐右衛門	鉄雄
12	清一	權
13	松次郎	新七郎
14	源之丞	恒次郎
15	正太郎	清次郎
昭和2	青井 外次郎	脇田 悦夫
3	栄吉	萬造
4	末吉	周太郎
5	清一	政十郎
6	百太郎	國太郎
7	鶴吉	國太郎
8	藤吉	岩次郎
9	梅太郎	鶴吉
10	栄重	清市
11	岩田 繁	甚之丞
12	青井 源太郎	伍一
13	憲二	捨三
14	儀一	松市
15	梅吉	式夫
16	房吉	一雄
17	川俣 初右衛門	文右衛門
18	豊光	制
19	久内	辰右衛門
20	青井 岳一	本一
21	甚市	由太郎
22	富士太郎	勇吉
23	金彦	政二郎
24	青井 岳三郎	正五郎
25	欽一	徳一
26	青井 晴夫	一宏
27	兵次郎	勝義
28	清和	芳一

年代	東組	西組
昭和29	清七	清
30	青井 義雄	弥五郎
31	信一	開一郎
32	藤三郎	三男
33	鈴木 島一	治昭
34	米一	光五郎
35	清一	正六
36	政和	賢一
37	正三	春吉
38	秀雄	芳夫
39	義徳	孝
40	俊秋	功夫

七月の祭礼は終りとなる

(2) 東組祭礼係階級

年代	係名と人員				計	備考	
	組頭	中組	下組				
弘化元年					13人	階級 148年前	
	5	4	4				
弘化4年	出頭	帳方	中組	小若連	25人	階級変更145年前	
	4	5	10	6			
明治4年	6	9	9	6	30人	東組川瀬となる	
〃 25年	8	5	12	15	40人		
大正元年	10	15	10	16	51人		
昭和2年	18	25	15	23	84人		
〃 12年	21	26	15	16	78人		
〃 26年	21	28	27	20	96人		
〃 32年	出頭	帳方	中組上	中組下	小若連	94人	階級変更
	27	20	20	19	8		
〃 38年	19	8	14	15	17	73人	昭和39年よりやまは中止

西組祭礼係階級

年代	係名と人員					計	備考
	1等組	2等組	3等組	4等組	5等組		
明治35年	1等組	2等組	3等組	4等組	5等組		
	25-26才	23-24才	21-22才	19-20才	17-18才		
明治40年	1等組	2等組	3等組				階級変更
	22-25才	19-21才	16-18才				
年代不詳	1等組	2等組	3等組	4等組	5等組		階級変更
	24-25才	22-23才	20-21才	18-19才	16-17才		

(3) 記録文書

○渡り鳥祭礼規則（明治三十五年 御鏡帳 渡り鳥西組）

- 第一条 若者ノギム尽ス条目左之如し
- 第二条 稽古ハ旧六月一日始メ当日八午前十二時ニハ当稽古場へ出頭スベシ但シ時期ニ依ッテ変更スルコトアリ
- 第三条 初日ヨリ祭礼後迄ハ寄太鼓三度目ニハ当稽古場へ必ず出頭致スベキ事
- 第四条 前条ノ場合ニ際シ本人病氣或ハ他ニ行キ或ハ職業ニテ出家スルトキハ必ず稽古場へ断リニ父兄出頭スルコト
- 第五条 初日ヨリ十日目迄ニ通笛セザル者ハ所有笛ヲ預ルコト
- 第六条 他人ヲ召喚ノ使者ニ当ルトキハ迅速帰場致スベキコト
- 第七条 退場ノ節ハ器具・片付然る後退場シ其ノ外器具ハ大切ニスルコト
- 第八条 若者ニ新入シ上者先君ヲ敬ヒ下ヲ構ム事而シテ先君ノ指令ヲ堅ク相守リ聊カ故障致サザルコト
- 第九条 不都合ノ事二度目ニハ若者組合ヲ除キ八分ニスルコト
- 第十条 技芸不熟ノ者中棚へ登ル事ヲ許サズ而シテ当日入用器具ヲ持運ビ其ノ他祭礼一切ノ事不都合ナク務ムルコト
- 第十一条 右条目落度ノ事トイヘドモ先君ノスルコトハ一切故障致サザルコト
- 第十二条 右ノ条目ニ違背スルトキハ庭へ下リテ謝ル事
- 第十三条 祭礼係ハ二十八才迄トス
- 第十四条 帳簿取扱フ者ハ三組目、四組目、二組ニテ必ず引受取扱フ事
- 第十五条 若者ノ組合ニ入ル人ハ必ず年令十七才未満之内ニ必入席致スベキ事
- 第十六条 西組祭礼係中便宜上十七才十八才ノ二年ヲ五等組、十九才二十才ヲ四等組、二十一才二十二才ヲ三等組、二十三才二十四才ヲ二等組、二十五才二十六才ヲ一等係員ト称シ区分ス
但シ養子ハ年令ニ拘ハラズ係員ニ入ルコト（未滿後ノ節一ヶ年トス）
- 第十七条 入会時期不在ノ者ハ当村帰宅ノ時係員ニ入ルベキコト又第十六条ノ事ハ後ニ入ル者ハ五等組ニスルコト（即チ同年入りハ同組ノモノトス）
- 東組の方の規則もほぼ西組と同じであるが、東組の方第十六条のところは、次のようになっている。
- 東組祭礼係中便宜上、十四才、十五才、十六才、ノ三年ヲ小若衆、十七才、十八才、十九才ヲ中組、二十才、二十一才、二十二才ヲ長方、二十三才、二十四才、二十五才ヲ出頭ト称シ区分ス

○約定書残

一 明治三十八年七月三十日、祭礼ノ際晩式ニ於テ、西組先番ニシテ、笛太鼓ノ式ヲ
経テカンカラヲ打チ始メシ中、中途ニシテ東組ヨリ圧勢ノニテ横打セシ結果、始
末将来見込相立タル故、以テ三十一日中老評議ヲ受、其場ニテ神意ニ及クハ年
重々以前ノ始末故、涙ト共ニ祭礼什物ヲ村方ヘ相渡シ候上ハ、御報恩之御志ハ力
ノ及ブ限共同動作ニテ、神仏ノ御為ニ御奉公仕メ可ク心意、連名満場一致ニテ、
左之通り連名連書仕リ候也

野田 爲 藏	脇 田 繁太郎	脇 田 作 助
野田 忠三郎	野 田 彦 一	野 田 謙
野 田 與 吉	野 田 吉三郎	野 田 甚之丞
野 田 菊太郎	野 田 甚 市	野 田 伊之七
野 田 與平治	野 田 竹治郎	野 田 常 一
野 田 清三郎	野 田 才兵衛	野 田 孫 市
脇 田 勝 重	野 田 徳之丞	

明治参拾八年七月三十一日

明治四拾年東西和議成り、左ノ条々ニ基キ茲ニ祭礼係立ツ

規 約 書 写

今般渡島水神祭礼執行方法ニ就キ、規約ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 第一条 祭礼係員ハ道徳ヲ重シ親睦ヲ主トスベシ
- 第二条 東西組共双方ニ四名ツソノ祭礼取締役員ヲ置クコト
満期ハ弍ケ年トス
但再選スルコトヲ得
- 第三条 普通係員ハ十六歳ヨリ廿五歳迄トス
- 第四条 普通係員ヲ区別シテ三種トス、十六歳ヨリ十八歳迄ヲ三等係員、十九歳
ヨリ廿一歳迄ヲ二等係員、廿二歳ヨリ廿五歳迄ヲ一等係員トス
- 第五条 取締役員ハ祭礼一切ノ事ヲ取締ルコト

第六条 普通祭礼係員ハ取締役員ノ命令ニ従ヒ、祭礼一切ノコトニ勤務スルコト

第七条 普通祭礼係員中、一等員ヨリ三名ノ役員ヲ設ケルコト

庶務理事長一人・庶務副理事長一人、会計一人但役員ハ総テ取締役員ノ
指名タルコト

第八条 船係ハ祭礼当日廿五歳以上ノモノ勤務スルコト

第九条 祭礼場所及月日変更ノ場合ハ、双方取締役員協議ノ上之レヲ定ムルコト

第十条 取締役員ノ提灯ハ円形ニシテ、祭礼役員ノ四字ヲ入ルルコト

第十一条 普通係員ノ提灯ハ長円形ニシテ、祭礼係ノ三字ヲ入ルルコト

第十二条 東西組中ニ係不及申、員外ノモノト雖モ不都合ノ行動アルトキハ、役員
協議ノ上何分ノ処分スルコト以上

明治四十年七月設定

本書ヲ正確ニスル為メ東西年行司区長連署ス

区 長	野 田 彦九郎
西年行司	脇 田 和 吉
同	同 代 吉
東年行司	川 瀬 惣四郎
同	同 濱次郎

以 上

当年ハ明治天皇御崩去ニ付、祭礼係員礼服ニテ八幡社ヘ参詣シタルノミナリ
右祭礼ノ際、入費ハ妻初穂ニテ支払、残金参四七拾老銭也

当村礼式ハ、毎年新七月三十日舉行スルモノナレドモ、明治天皇御一年祭ニ付、悼意
ヲ表スル為メ新八月壹日之ヲ舉行スル祭礼当夜翌年祭礼取締役員惣選挙ニ付、役員ハ
野田闕太郎・野田彦九郎・脇田和吉・脇田定五郎ノ四名ト定マレリ

大正式年八月壹日、祭礼弁金割ハ評議ノ上等級割ノ事ニ決定ス 但シ等級割ハ別紙弁
金帳ニ記ス

祭 礼 講 評 綴

一、白丸提灯ハ例年ニ比シ製作粗悪ニシテ、新ラシ物ニ修理ヲ典品多クアリ故ニ、

以後注文ハ是ガ注意ヲ払ヘ

- 一、提灯調ベハ頗ル悪シク、殊ニ元結ノ切レアル者多大ナレバ、注意ヲナセ
- 一、会計ノ便利上、必ズ買物ハ書付ヲ申受クルコト

明治四拾五年度

祭礼会所 野 田 幸之助
同 役 員 野 田 國太郎
野 田 甚兵衛
野 田 織右衛門
脇 田 代 吉

大正拾老年七月貳拾日夜

臨時總會開会 当元 野田鐵雄

- 一、弁金割ノ件
右ハ新役場戸数割賦課ノ額ニ準ス
- 二、妻奉賀ノ件
右ハ爾後廃止ノ事
- 三、祭礼役員ノ件
右ハ従来祭礼係トシテ、役員ノ意見ニ違反スル事往々アリ、以後斬カル行為ハ絶
對ニセズ必ズ服従スル事
- 四、祭礼送込ミノ件
右ハ長持ツリハ年齢三拾才迄ノ中老トス
- 五、祭礼係会合ノ場合飲酒ノ件
右ハ禁酒法案ヲ嚴守シ飲酒セザル事
- 六、祭礼費用立替金ノ件
右ハ祭礼役員ニテ立替ヲ願フ事
- 七、祭礼係稽古手当ノ件
右ハ茶菓料トシテ金拾円ヲ支給スル事

八、祭礼余興ノ件

弁金について中老会議開催

決議事項左の如し

- 一、弁金割当の基礎等級は祭礼役員及若者一等級を以って定める
- 一、弁金額算定方法は戸数割三分・等級割七分と定める
- 一、弁金未納者は中老会議に於て協議処分する事

以 上

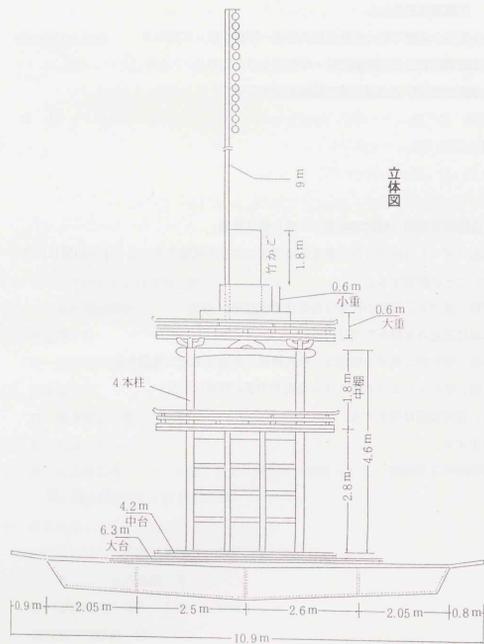
○中老会議議事録綴（昭和39年度） 渡り祭り東組

- 一、山船（ダシ）は河川改修工事等の諸事情により不可能であるから本年以降は出さ
ないことに決定する。
- 一、前項に基づき、祭礼の行事は新案は道行のみ。
本案は送込みを併せて当日行う。
- 一、今後、祭礼時に関する事項は、祭礼役員及若連によって裁定する。
- 一、今後、祭礼元における宴には中老及若中老の招待はしない。
又、見舞披露は廃止する。
- 右 決定する。

昭和39年7月30日

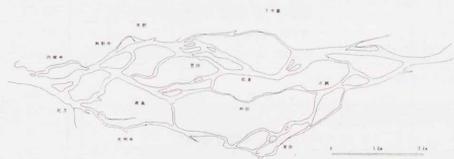
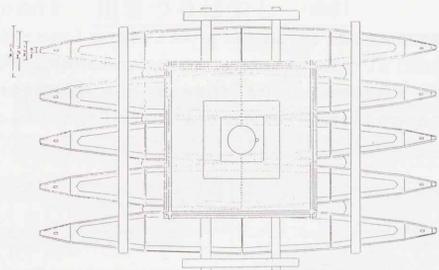
祭礼役員 川 瀬 清 治

(4) 川まつりのやま



立体図

平面図



川島村(明治24年頃 西暦1891年)

新道行

笛
つが
がく

♩=96

本道行

笛
つが
がく

♩=100

シャギリ

笛
つが
がく

♩=88

川まつり道行き 川まつりばやし (原譜)

(西組)

「オカジャラキ」

採譜 田中 鴻一

笛
つが(小高い)
がく(小高い)

♩=88

「しんぐるま」

笛
つが
がく

♩=88

川まつり資料館 建設・運営・助言協力者

平成4年

「新道行」

「シャギリ」

役 職	氏 名	現 在
川 島 町 長	野 田 知 澄	現職
四 町 教 育 長	西 脇 成 紀	〃
四 町 社 教 課 長	臼 井 博	故人
〃	田 中 鴻 一	岐南町北小校長
四 町 社 教 主 事	市 原 信 治	清美村小校長
〃	丹 羽 利 国	美山町小教頭
町 公 民 館 副 館 長	大 堀 清	穂積中学校長
〃	三 尾 悟	岐阜市日野小校長
〃	堀 部 邦 雄	本巣町小教頭
町 民 会 館 館 長	野 田 敏 雄	町総務課長
〃	横 山 勝 利	町企画 〃
〃	川 瀬 孝 雄	現職
昭和61年度保存会長	川 瀬 銀 一	
昭和62年度 〃	川 瀬 宣	
昭和63年度 〃	川 瀬 演	
平成元年度 〃	野 田 五 作	
平成2年度 〃	澤 田 正 夫	
平成3年度 〃	野 田 礼 一	
平成4年度 〃	川 瀬 修 一	
笛 演 奏 者	東 高 橋 勉	
〃	西 野 田 広 行	
大 太 鼓 奏 者	東 川 瀬 義 之	
〃	西 野 田 守 男	
小 太 鼓 奏 者	東 川 瀬 福 男	
〃	西 野 田 鉄 治	
川まつり資料館館長	野 田 薫	文化財委員

編集後記

木曾川の水との戦いに明け暮れ、祭礼を通して奉納されてまいりました「川まつり」について、私は昭和53年川島町文化財保護審議会委員を拝命、爾來保存再現に力を注いでまいりました。

どんなに移り変わり行く社会情勢の中にあってもこの地に残る輝かしい先人の遺産を親から子、子から孫へと伝承されるようまた、これからの「川まつり」を支える人々にその由来と伝統を理解して戴く一つの資料として今回一冊の本にまとめ上げました。

中身については未だ不備の所も多々あるかと存じますがお許し下さい。

編集するにあたり多くの関係者の皆さんには大変お世話を戴き厚く御礼申し上げるとともにいつの日か「川まつり」が川面に浮かぶ事を念じます。

平成4年7月30日

野田 薫 記

(注) 川まつりに関係する資料がありましたら御連絡下さい。
(☎058689-2108)

ふる里の川まつり

発行日 平成4年7月30日

発行者 羽島郡川島町渡町
川まつり保存会

印刷 浅野印刷機

